

# 前田町屋遺跡(第1次)発掘調査報告

— 志都三雲町屋合字前田・町屋 —

1 9 9 7 . 3

三重県埋蔵文化財センター

## 序

埋蔵文化財は、それぞれの地域における大切な過去の遺産であり、現在に生きる我々が後世に残していかなければならないものです。しかし、我々の生活が便利で豊かなものになっていく過程で、多くの埋蔵文化財はその犠牲となってきたのも否定できない事実です。今ある快適な暮らしがそれらの犠牲の上に成り立っていることを、常に頭の片隅にでも置いておくことが必要でしょう。

今回、ここにご報告致しますのは、一般県道津三雲線国補橋梁整備工事に伴って消失する前田町屋遺跡の発掘調査成果であります。調査の結果、古墳時代と鎌倉時代中頃から室町時代を中心に、様々な遺構や遺物が確認されました。当遺跡の所在しております三雲町での本格的な調査としては、昭和47年に行われた中ノ庄遺跡以来、実に25年ぶりのこととなります。今回の調査では、古墳時代から室町時代に至る様々な遺構や遺物を確認する事ができました。特に古墳時代の周溝からは、石杵等の大変珍しい貴重な資料も出土しています。今回の調査の成果が、三雲町の郷土の歴史を解明していく上で、広く活用されることを願ってやみません。

調査にあたっては、県土木部道路建設課や三雲町教育委員会及び地元の方々には多大なご理解とご協力を賜りました。文末ながら、深く感謝の意を表明致します。

平成9年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 奥村 敏夫

# 例 言

1. 本書は、三重県一志郡三雲町泉合字前田・町屋に所在する、前田町屋（まえたまちや）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、一般県道津三雲線国補橋梁整備工事に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。
3. 調査は次の体制で行った。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
係長	杉谷 政樹
技師	日榮 智子
主事	佐藤 公

4. 調査にあたっては、三重県土木部道路建設課、三雲町教育委員会及び地元の方々からの多大な御協力を頂いた。
5. 発掘調査後の出土遺物の整理及び当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行い、以下の方々の補佐を得た。執筆及び全体の編集や出土遺物の写真撮影は日榮智子が行った。

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、柿原清子、川口 愛、川崎志乃（臨時技術補助員）  
楠 純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、  
富楽幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、浜崎住代、早川陽子、松本晴美、松月  
浩子、森島公子、柳田敬子（50音順、敬称 略）

6. 挿図の方位は、全て真北で示している。なお、磁針方位は西偏6°20′（平成3年）である。
7. 本書で用いた遺構表示略記号は下記のとおりである。

SE：井戸 SK：土坑 SD：溝 SX：墓 SR：河道

8. 出土遺物や資料は、全て三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9. スキャンニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。  
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# 本文目次

I 前言	1
II 位置と環境	2
III 層位と遺構	6
IV 遺物	13
V 結語	31

# 挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 遺跡地形図	5
第3図 調査区位置図	5
第4図 調査区平面図	7～8
第5図 調査区南壁・東壁土層断面図	9
第6図 S X 3 実測図	10
第7図 S E 25 実測図	11
第8図 S E 16 実測図	11
第9図 出土遺物実測図 (1)	14
第10図 出土遺物実測図 (2)	15
第11図 出土遺物実測図 (3)	16
第12図 出土遺物実測図 (4)	17
第13図 出土遺物実測図 (5)	18
第14図 出土遺物実測図 (6)	19
第15図 銭貨出土状況実測図	21
第16図 出土銭貨拓影 (1)	23
第17図 出土銭貨拓影 (2)	24
第18図 出土土錘・砥石実測図	25
第19図 出土加工円盤実測図	26

# 表目次

第1表 出土遺物観察表 (1)	26
第2表 出土遺物観察表 (2)	27
第3表 出土遺物観察表 (3)	28
第4表 出土遺物観察表 (4)	29
第5表 出土銭貨観察表	29
第6表 出土土錘観察表	30
第7表 出土砥石観察表	30
第8表 出土加工円盤観察表	30

# 図版目次

図版1 調査区全景	34
S X 3	34
図版2 S E 25	35
S E 16	35
S X 3 土器出土状況	35
図版3 出土遺物写真 (1)	36
図版4 出土遺物写真 (2)	37
図版5 出土遺物写真 (3)	38

# I 前 言

## (1) 調査の契機

三重県教育委員会及び三重県埋蔵文化財センターでは、国及び県にかかる各種公共事業に関して各開発部局の事業を照会し、事業予定地内にある文化財の確認とその保護に努めている。こうした中で、三重県土木部道路建設課から、一般地方道津三雲線国補橋梁整備工事にかかる事業計画の回答を受けた県埋蔵文化財センターでは、事業予定地内の遺跡分布調査を実施した。事業予定地内には周知の遺跡の存在は知られていなかったが、土師器や山茶碗等の散布が確認された。そこで、遺跡の詳細な実態を把握するべく平成8年3月12日に県埋蔵文化財センターが試掘調査を実施した。その結果、事業地内には遺溝や遺物が確認された。

この取り扱いについては、その保護に努めるよう、県土木部や道路建設課や久居土木事務所と県埋蔵文化財センターの間で協議を重ねた。しかし、現状保存が困難なため、やむなく事前に発掘調査を行うこととなった。

前田町屋遺跡は、現農道を挟んで南北に広がることが確認されている。しかし、農道は住民の生活道路として利用されており、その確保のために今回の調査は農道の北側の約1,500㎡について第一次調査として実施した。南側についても、来年度県埋蔵文化財センターによる調査が予定されている。また、当遺跡から約200m南方には平成7年度の試掘調査で新たに確認された大明神遺跡が広がっており、この遺跡も来年度の調査予定となっている。

## (2) 調査の経過

発掘調査は、平成8年5月7日から9月2日まで実施した。また、調査期間中は梨畑への進入路を確保するために、控えていた部分について、9月11・12日に追加調査を行った。最終的な調査面積は控えていた部分も含め、約2,000㎡であった。なお、小地区の設定にあたっては、4m×4mを基準として北から南へ数字、西から東にアルファベットの番号を与え、地区名は北西隅の杭を基準とした。

調査日誌 (抄)

月 日

- 5. 7 発掘資材搬入、プレハブ・トイレ設置。
- 5. 9 調査区表土の重機による除去開始。
- 5. 15 表土除去終了。小地区設定及びレベル移動。
- 5. 16 南側から遺構検出開始。
- 5. 21 SR1掘削開始。
- 5. 23 SX3掘削開始。古墳時代初頭の土師器瓢壺出土。SK5掘削。
- 5. 27 SK7・8掘削。基準点測量。
- 5. 28 16列以北包含層掘削。トレンチ掘削。SK11掘削。
- 6. 3 14・15列包含層掘削。
- 6. 4 13・14列包含層掘削。SR1、16列以南写真撮影。
- 6. 5 13・14列検出。SE16掘削。
- 6. 6 e14・15、f14・15検出。遺構平面実測のための基準点設定。
- 6. 7 16列以南清掃後、写真撮影。13列以北包含層掘削。d15・16検出。16列以南、遺構平面実測開始。
- 6. 10 16列以南遺構平面実測終了。遺構レベル計測。南壁土層断面実測。
- 6. 11 南壁土層断面土色注記。SX3土層断面実測、写真撮影。
- 6. 12 c14・15～f14・15検出。
- 6. 13 SX3より石片出土。SK23掘削。
- 6. 17 g13・14、h13・14 c13～f13検出。
- 6. 19 SE25掘削。SK26～28掘削。
- 6. 20 12列包含層掘削開始。c11、c12～f12検出。SK29～32掘削。SE25写真撮影。
- 6. 21 11列包含層掘削開始。c、d12検出。SE31掘削。
- 6. 24 b～d12検出。SE25写真撮影。SE16清掃。
- 6. 25 10列包含層掘削開始。f～h12.13.14検出。SE16写真撮影。
- 6. 26 SX3上層遺構、平面実測およびレベル計測。SE31土層断面実測。

6. 27 9列包含層掘削開始。南壁崩落防止のための土養積み。SX3のd15付近から二重口緑壺出土。出土状況写真撮影。
6. 28 SR1遺構平面実測。SX3出土の二重口緑壺取り上げ。
7. 2 SX3、e14付近で2個体目の二重口緑壺出土。出土状況写真撮影後、取り上げ。SE31の底付近から石組み検出。SD33・SK35掘削。
7. 3 b～d11検出。SK36・SD37掘削。
7. 4 e11検出。SD33土層断面実測。
7. 5 f11検出。
7. 10 8列包含層掘削開始。SD38掘削。
7. 11 b～d10・h10 検出。SD39掘削。
7. 15 SD40・41、SK42～44掘削。
7. 16 7列包含層掘削開始。SK45掘削。
7. 17 11列以南清掃後、写真撮影。
7. 18 排土置場にしていた調査区北側の1/4について表土掘削開始。11列以南の遺構平面実測のための基準点設定後、実測開始。
7. 22 11列以南遺構平面実測終了。レベル計測。
7. 24 b～d5・6・7検出。SK52より骨出土。検出状況の写真撮影。
7. 25 b～d3・4検出。SK59～63掘削。
7. 26 SK58土層断面実測。
7. 29 SE25平面実測開始。
8. 1 SR1の範囲および底確認のため、調査区の北壁と7列に平行してトレンチ掘削。
8. 5 SE16平面実測開始。
8. 6 SR1、9列まで完掘。9列以北は平面形のみ確認。
8. 8 SE82掘削。底付近より木杵出土。出土状況写真撮影。SX3の下端ライン実測・写真・レベル計測のための水抜き。
8. 9 SX3清掃後、写真撮影および下端ライン実測、レベル計測。
8. 12 11列以北清掃後、全体の写真撮影。
8. 13 11列以北の遺構実測のための基準点設定後、実測開始。
8. 14 西壁土層断面実測。
8. 15 11列以北の遺構平面実測終了後、レベル計測。
8. 16 SE16・25断面実測開始。
8. 20 SX3等高線図作成。
8. 30 SE25の重機による断ち割り。攪乱部掘削。下層確認のため調査区西壁際に重機により部分的にトレンチ掘削。
9. 11 調査区西側拡張区の調査開始。表土除去後、検出および遺構掘削。平面実測のための基準点設定。
9. 12 拡張区遺構平面実測、レベル計測。現地での作業はすべて終了。

## II 位置と環境

前田町屋遺跡(1)の立地する三雲町は、三重県のほぼ中央に位置する。北は雲出川を挟んで津市・久居市・香良洲町、南は松阪市、西は嬉野町に接し、東で伊勢湾に面している。当遺跡は雲出川が伊勢湾に注ぐ河口付近にあり、雲出川と碧川とに挟まれた標高約2～2.5mの微高地上に位置する。行政上は三重県一志郡三雲町屋合字前田・町屋に属する。遺跡のすぐ北を流れる雲出川は高見山地の三峰山に源を発し、美杉村、白山町、久居市、一志町、嬉野町、香良洲町を貫き、伊勢湾に注ぐ県下でも有数の河川である。多くの支流を持ち、それらを含めた流域には、古くから多くの遺跡が知られている。

縄文時代の遺跡は、当遺跡周辺では確認されていない。しかし、今回の調査では縄文晩期の遺物が出土しており、付近で縄文時代の遺跡が発見される可能性はある。

弥生時代では、前期や中期の遺構や遺物が確認された中ノ庄遺跡<sup>(1)</sup>(2)が重要視される。この遺跡は、三重県の遠賀川式土器の伝播ルート上の一地点と考えられている遺跡である。

古墳時代前期には、今回の調査でも出土している二重口緑壺形埴輪が確認されている松阪市大足町の大足古墳<sup>(2)</sup>(3)や同市深長町深長古墳<sup>(3)</sup>(4)が造営され始める。時期的にも当遺跡と相前後しており、



第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000) (国土地理院「松阪」「大河内」「大碑」「松阪港」1 : 25,000から)

古墳の出現期の様相を考えるうえでの重要な遺跡である。また、隣接する嬉野町内は前方後方墳が多数確認されている県内でも有数の地域である。松阪市小野町及び、嬉野町上野にある向山古墳(5)をはじめ、筒野古墳(6)や西山古墳(7)、鏑山古墳(8)などがある。

後期になると前述の中ノ庄遺跡で円墳が確認されており、馬形埴輪や円筒埴輪などが出土している。また、松阪市美濃田町に美濃田古墳群(9)が造営される。

集落跡としては、古墳時代前期には三雲町久米の貝塚遺跡(10)がある。また、同町上ノ庄の宮ノ腰遺跡(11)では、前期から後期にかけての河道跡や堅穴住居から、多くの木製品を含む遺物が確認されている。

古代の遺跡としては、前田町屋遺跡のすぐ南で平成7年度に三重県埋蔵文化財センターが実施した試掘調査で新たに確認された大明神遺跡(12)がある。試掘調査の結果では、奈良時代を中心とした遺構・遺物が検出されている。また、前述した宮ノ腰遺跡から平安時代末の河道や溝などが確認されているほか、中ノ庄遺跡からは鎌倉時代に遡ると考えられている瓦塔が出土している。さらに宮ノ腰遺跡周辺は平安時代末から南北朝時代にかけて、醍醐寺領曾祿庄が広がる領域である。その他にも、嬉野町や松阪

市にも及ぶ数多くの荘園が存在していたことで知られている。<sup>(7)</sup>

室町時代になると、当遺跡の所在する星合の地には中世の参宮街道が通っていたことがいくつかの文献史料から明らかになっている。<sup>(8)</sup>詳細は結語で述べるが、これらの文献に「星合の里」として登場することから、今回の調査で確認された中世の遺構がこれに相当すると推定できるのである。

また、室町時代から戦国時代にかけては、北畠氏が南伊勢を中心に勢力を拡大しており、当地域にもその関連でいくつかの中世城館が築かれている。曾原城(13)や久米城(14)や星合城(15)などは北畠氏と関連する城館と考えられている。<sup>(9)</sup>また、三雲町の肥留には、南北朝時代に伊勢に移り住んで戦国時代には北畠氏の被官となった、佐藤氏が居住していたことが知られている。<sup>(10)</sup>この佐藤家に伝わる「佐藤文書」には北畠氏関連の記述が多くみられ、16世紀中頃以降、織田信長の伊勢侵攻が本格化してくる様相を今に伝えている。<sup>(11)</sup>これ以降、室町時代から当地域にも勢力を誇っていた北畠氏も、織田信長の全国制覇の波にのまれて滅亡する運命を辿る。そして、信長の跡を継いだ豊臣秀吉による天下統一の事業に当地域も影響を受けていたことが、豊臣秀次朱印状の中に市場庄郷や星合郷の名称がみえることなどから確認できるのである。<sup>(12)</sup>

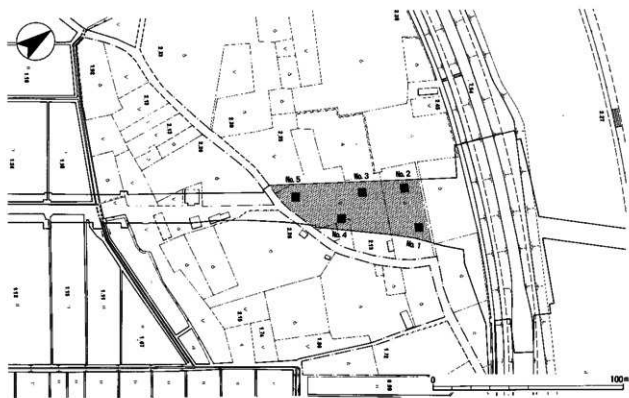
## 【註】

- (1) 谷本鋭次「中ノ庄遺跡発掘調査報告」(三重県教育委員会、1972年)。
- (2) 小林 秀「大足遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊1(三重県埋蔵文化財センター、1990年)。
- (3) 増田安生「深長古墳」『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊(三重県教育委員会、1987年)。
- (4) 伊勢野久好「第1章 位置と環境」『天花寺山』(一志町・嬉野町遺跡調査会、1991年)。
- (5) 伊藤克幸「貝塚遺跡」『昭和51年度県営農場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(三重県教育委員会、1977年)。
- (6) 平成8年度三重県埋蔵文化財センターが調査した。
- (7) 小林 秀「醍醐寺曾祿庄—荘園の過密地域—」『ふるさと三雲今と昔』(三雲町史編纂委員会、1996年)。
- (8) 「四 鎌倉時代から室町時代までの交通路」『一志郡史』上巻其一 (一志郡町村會、1955年)の86~98頁。
- (9) 岡田文雄「24 一志郡三雲村」『三重の中世城館』(三重県教育委員会、1977年)。
- (10) 小林 秀ほか「ふるさと三雲今と昔」(三雲町史編纂委員会、1996年)の28・29頁。
- (11) 註(10) 文献の32・33頁。
- (12) 註(10) 文献の34・35頁。





第2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第3図 調査区位置図 (1 : 2,000) スクリーントーン部：調査区 (■は試掘坑)

### III 層位と遺構

#### 1 層位

当遺跡の基本的な層位は、第1層：表土、第2層：暗黄褐色土、第3層：暗褐色土（遺物包含層）第4層：淡黄褐色砂（地山）であり、遺構検出は第4層上面で行った。遺構検出面までの深さは、1.0～1.2mで、南端から40～60mの中央部は0.9～1.0mと若干浅くなっていた。包含層の厚さは0.4～0.8mで南から北に向かって厚くなっている。また、南端から35～40mの部分で、包含層中に貝殻の混入する層が認められた。

#### 2 遺構

今回検出された主な遺構には、古墳時代初頭と鎌倉時代中頃から室町時代のものがある。また、遺構とはいえないが、飛鳥時代から平安時代頃と思われる河道も検出されている。以下、時期別、遺構毎にその概略を述べる。

##### (1) 古墳時代初頭

###### S X 3（前田町屋1号墳）（第6図）

調査区南端部で検出された。

東西12.5m、南北14.1mの規模でコの字上に巡る溝で、古墳の周溝であると考えられる。断面はU字形で、検出面からの深さは、深い所で約1m、浅い所で約0.5mである。遺構埋土は第1層：暗灰褐色砂質土、第2層：暗黄褐色土、第3層：暗灰褐色砂質土に分かれ、それぞれの層に黄褐色粘質土ブロックが混入しており、第3層には若干鉄分斑が見られた。方向は南北がN28°E、東西がW28°Nである。

遺物は、東側の肩付近から底部に朱の付着した石杵（7）が出土した。また、南側の溝の底付近からは、二重口縁壺（1・2）が、口縁部を下にした状態で2個体ほぼ完形で出土した。その他の出土遺物には、土師器の瓢壺（3）、小型高杯（4）、小型器台（5）がある。

##### (2) 鎌倉時代中頃～室町時代

###### A 井戸

###### S E 16（第8図）

調査区南端から検出された石組井戸である。東側は調査区外に至る。

掘形は残存長径1.5mの楕円形で、現存深は0.95mである。井戸本体は掘形のやや西寄りに位置している。0.1～0.2mの石が円形に12段階残存していた。石組みの内径は0.45m程である。石組の下については、底を1.35mまで掘削したが、確認できなかった。

遺物は土師器の皿、鍋、羽釜（35）、無軸陶器皿、椀等が出土した。時期は14世紀後半～15世紀前半と考えられる。

###### S E 25（第7図）

S E 16の西で検出された石組井戸である。

掘形は長径3mの楕円形で、現存深は約1.3mである。井戸本体は掘形の南寄りに位置している。0.2～0.3mの石が11段階ほぼ円形に残存していた。石組みの内径は0.8m程で、その内側には水溜用に直径約0.38～0.4mの曲物が3段、高さ0.27mに据えられていた。曲物は側板の高さが0.15m、厚さが0.05mで底板を欠き、3段を入れ子状態にタガ状の材で緊縛する構造になっていた。重なり部分はそれぞれ0.05m程であった。ただし一番外側の曲物は高さが0.1mほどしか残存していなかった。

遺物は無軸陶器の椀（16）土師器皿、鍋（18・20）、羽釜（17・21）、常滑窯製品甕、土鍾（275）等が出土している。時期は、15世紀中葉と考えられる。

###### S E 31

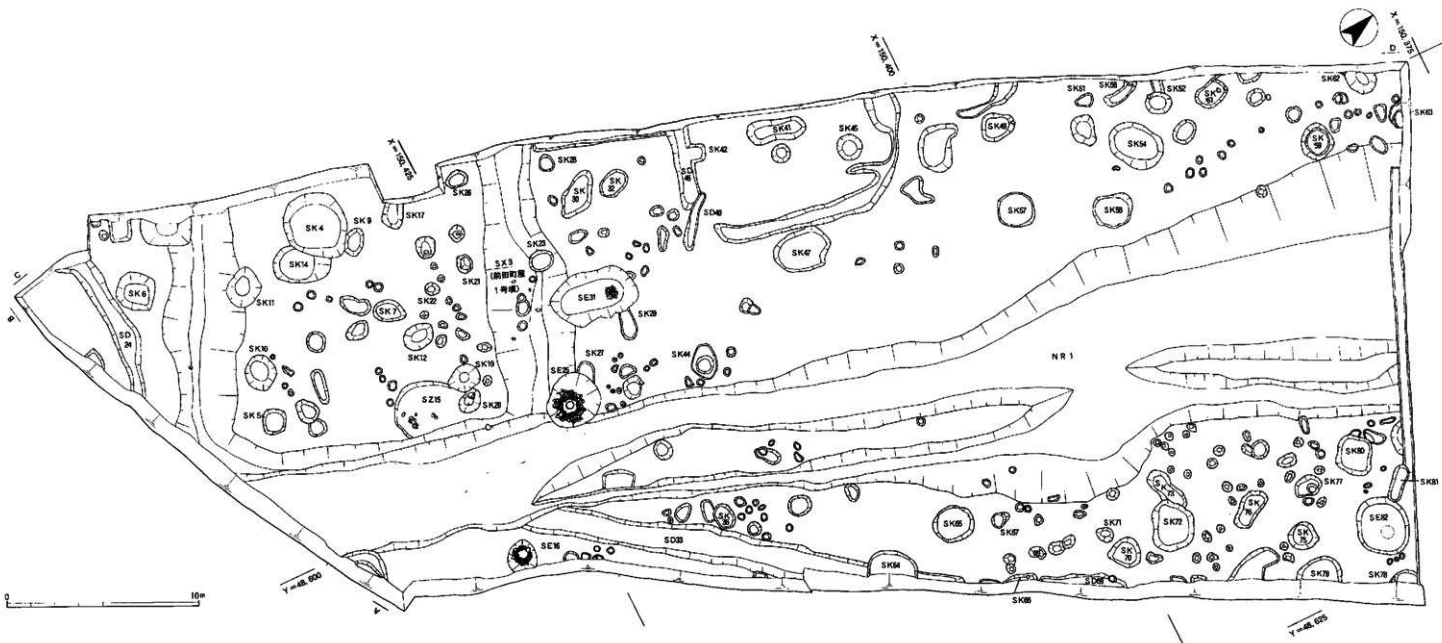
S E 25の西で検出された。

掘形は長径4.6m、短径2.7mの楕円形で、現存深は0.7mである。石組み等の内部施設もなく、当初は土坑として扱っていたが、北側の底付近から石がまとまって出土したため、井戸底に石が投入されたものと判断した。埋土は、暗灰褐色砂質土に暗灰褐色粘質土の一部に混入しており、石の間は暗灰色粘土の堆積がみられた。

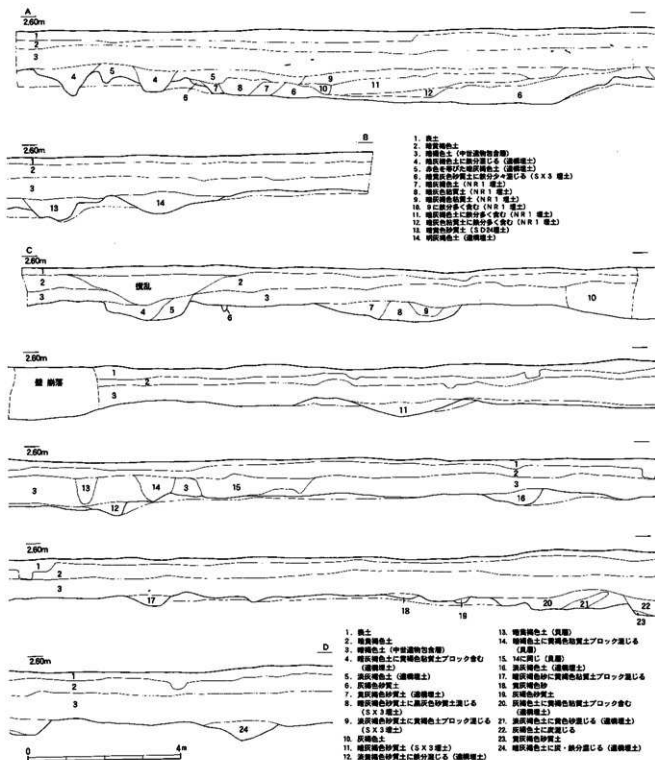
遺物は、土師器皿（12～14）、鍋（11）、常滑窯製品甕（15）、無軸陶器椀（8～10）のほか、加工円盤（291・294）、土鍾（255・263）も出土している。時期は13世紀後半～14世紀後半と考えられる。

###### S E 82

調査区南東隅で検出された。掘形は直径3.0mの



第4図 調査区平面図 (1 : 200)



第5図 調査区 南壁・東壁 土層断面図 (1:100)

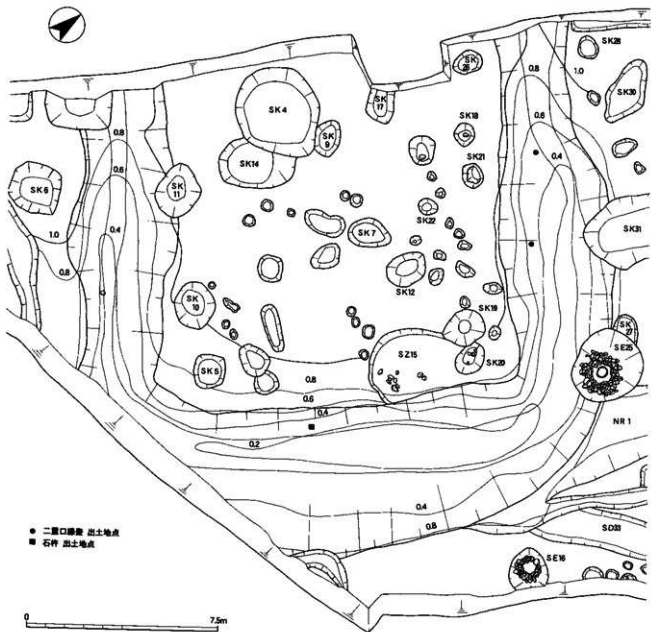
ほぼ円形で、現存深は約1.0mである。SE31同様、当初は土坑として掘削していたが、底付近から曲物が出たため井戸と判断した。曲物は直径約0.7mで、掘形の東寄りに位置している。埋土は褐灰色粘質土を0.5m程掘削した所で暗灰色粘土に変わり、曲物内も同様の埋土が堆積していた。遺物は土師器皿(22)、碗(23)、鍋(28)、羽釜、常滑窯製品

甕(24)、鉢(26)の他、鉄製品や底部に墨書のある無釉陶器の碗(25)等が出土している。

#### B 土坑

#### SK 4

調査区西南で検出された。長径3.6m、短径3.3mの楕円形である。1mほど掘削したところで、拡張する前に存在していた調査区の壁が崩落したため、



第6図 SX 3 (前田町屋1号墳)実測図(1:150)

底は確認できなかった。遺物は土師器鍋(29)、羽釜、常滑窯製品甕、施釉陶器では古瀬戸様式期の壺類等が出土している。時期は15世紀中葉頃であろう。

#### SK 5

調査区南東で検出された。長径1.4m、短径1.2mの隅丸方形で、現存深は0.6mである。遺物は土師器皿、鍋、無釉陶器椀等が出土している。時期は13世紀中葉頃であろう。

#### SK 11

調査区南端でSX 3を切って検出された。長径2.2m、短径1.8mの楕円形で、現存深は0.4mである。遺物は土師器鍋(31)、無釉陶器椀(30・32)のほ

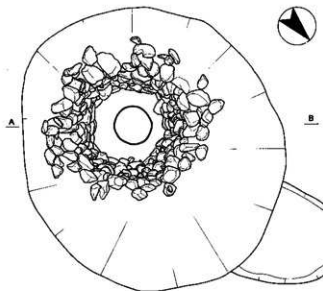
か、元豊通宝(239)が出土している。時期は13世紀中葉頃であろう。

#### SK 12

調査区南端部中央で検出された。長径1.7m、短径1.3mの楕円形で、現存深は0.35mである。遺物は土師器皿、鍋(33)、無釉陶器椀のほか、紹聖元宝(245)が出土している。時期は13世紀中葉頃であろう。

#### SK 14

調査区西南で検出された。西肩はSK 4に切られる。長径3.1m、短径1.9mの長方形で、現存深は0.9mである。遺物は土師器皿、鍋(49)、無釉陶器椀



(45~47)、常滑窯製品甕等がある。時期は13世紀中葉頃であろう。

#### S K 23

調査区西南、S X 3の上面で検出された。長径1.4m、短径1.2mの楕円形の土坑で、現存深は0.75mである。遺物は他の土坑に比べて、比較的多く、土師器皿(37・43・44)、鍋(40~42)、羽釜、無軸陶器碗(36・38)、皿(39)等が出土している。時期は概ね13世紀後葉であろう。

#### S K 30

調査区西南、S K 23の北で検出された。長径2.8m短径1.3mの楕円形の土坑で、現存深は0.8mである。遺物は土師器皿、鍋(65)、無軸陶器碗(64)等が出土している。時期は13世紀中葉に位置づけられよう。

#### S K 41

調査区中央、西壁際で検出された。長径3.1m、短径1.9mの細長い土坑で、現存深は、0.15~0.25mで北から南に向かって若干傾斜している。遺物は、土師器皿、鍋、羽釜、無軸陶器碗(92)、皿(93)常滑窯製品甕(94)の他、銭貨2枚(250・251)が出土している。当遺構からは骨も出土しており、墓の可能性も考えられよう。時期は13世紀後葉であろう。

#### S K 50

調査区北部、西壁寄りで検出された。長径3.6mの楕円形の土坑だが、現存深は0.1~0.2mと浅い。遺物は土師器鍋(99)、無軸陶器の碗のほか、完形の土師器皿(91)、元豊通宝(237)が出土している。時期は14世紀後半と考えられる。

#### S K 52

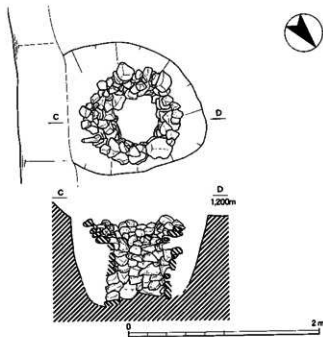
調査区北部、西壁寄りで検出された。長径1.3m、短径1.2mの円形に近い楕円形で、南側の肩に直径0.2mの石が据えられていた。骨が出土している他、時期を決定できる様な遺物はほとんどなかったが、周囲の状況から中世の遺構であると思われる。S K 50同様、墓である可能性もあろう。

#### S K 54

調査区北部、西壁寄りで検出された。長径2.9m、短径2.1mの楕円形の土坑で、現存深は、0.6mである。遺構上面から貝殻がまとめて出土した他、遺



第7図 S E 25 実測図(1:40)



第8図 S E 16 実測図(1:40)

物には、土師器皿(68)、鍋(71)、無釉陶器碗(69)、常滑窯製品甕(70)等がある。時期は14世紀後半と考えられる。

#### S K 58

調査区北部、S K 54の東で検出された。長径2.3m短径1.9mのやや不定形な楕円で、現存深は0.5m、埋土は灰褐色砂質土に黄褐色砂が混入する。遺物は土師器皿、鍋(62)、無釉陶器碗、皿(81)、常滑窯製品甕等が出土している。時期は14世紀後半と考えられる。

#### S K 60

調査区北端部、西壁寄りで検出された。長径2.0m短径1.7mの円形に近い楕円形で、現存深は0.6mである。中央部のピット状に窪む部分の埋土は黒褐色土で当初は、別の遺構として掘削していたが、出土遺物からも時期差はないと思われ、同遺構と判断した。遺物は土師器皿(59)、鍋(60~62)、無釉陶器碗(50~57)、皿(58)等が比較的まとまって出土した。無釉陶器碗(50)は完形で出土している。時期は13世紀中葉に位置づけられよう。

#### S K 63

調査区北端部、北壁際で検出された。残存長径1.6m、残存短径0.75mで、現存深は、西側では0.1m程だが、東側では0.5mと深くなる。北側は調査区外に至るため全貌は不明である。遺物は土師器皿、鍋、無釉陶器碗、常滑窯製品甕等が出土している。時期は14世紀後半~15世紀中葉と考えられる。

#### S K 65

調査区北部、東壁際で検出された。長径2.1m、短径1.9mの楕円形で、現存深は0.75mである。遺物は土師器皿、鍋、無釉陶器碗のほか、施釉陶器では古瀬戸様式期の折縁深皿(97)等が出土している。時期は14世紀後半代と考えられる。

#### S K 76

調査区北端部、東壁寄りで検出された。長径2.2m短径1.1mの細長い土坑で、現存深は、0.25mである。遺物は土師器皿、鍋(98)、無釉陶器碗、施釉陶器では古瀬戸様式期の壺類等が出土している。時期は13世紀中葉であろう。

#### C 溝

#### S D 24

調査区南端で検出された東西溝である。東西両端は、調査区の壁際で南に屈曲するようである。断面は箱型で、最大幅は1.3m、現存深は0.2~0.3mで、東から西に向かって若干傾斜している。埋土は暗灰褐色土に灰褐色粘質土ブロックが混入する層の下に淡黄褐色砂質土の堆積がみられた。方向はW33° Nである。遺物は無釉陶器碗の底部が1点出土したのみで、時期は概ね13世紀中葉と考えられる。

#### S D 33

調査区東壁際中央で検出された東西溝である。東端は調査区外に至り、西端で流路と切り合う。断面は箱型で、最大幅は2.0m、現存深は東西両端では、0.2m程だが、中央部では0.35~0.45mと深くなっている。埋土は暗褐色土の下に暗褐色粘質土の混入する暗褐色砂質土が堆積していた。方向はN49° Eである。遺物量は少なく、土師器皿、鍋が出土している。時期は概ね13世紀代の中で捉えられよう。

#### 3 河道

##### (1) 飛鳥~平安時代

#### S R 1

調査区の北西から南東を縦断する状態で流れていたものである。調査区南壁から11mから37mと、44mから調査区西壁の間に中洲状の部分を持つ。河道の幅は南東部では約7m、北西部では約12mである。現存深は南東部では約0.8mだが、北東部では底まで確認できなかった。埋土は暗灰褐色粘質土、暗灰色粘質土、暗灰色粘土の順に堆積しており、底部には0.1~0.2mの鉄分沈着層がみられた。また、各層中にも鉄分の混入は顕著であった。方向はN26° Eである。遺物は土師器皿(113・115~117)、碗(112・114)、甕(118~120)、灰粘陶器碗(109・111)、無釉陶器碗(101~108)、土錘(267)等が出土しており、S R 1は少なくとも平安時代末には埋没していたと考えられる。

## IV 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、包含層出土が全体の3分の2程度を占め、整理用コンテナに約100箱である。時期は大別して古墳時代初頭と中世に分かれる。中世は鎌倉時代中頃～室町時代のもものが中心であるが、SR1及び包含層から、飛鳥・奈良時代および平安時代のものも若干出土している。また、縄文時代晩期の鉢も1点出土している。以下、今回の遺物の報告に関しては、遺構（SR1含む）出土遺物は遺構別に、包含層出土遺物は時期別にその概略を述べる。なお、銭貨、土鍾、砥石、加工円盤については、遺構、遺構外出土の別なく一括して、各々に関する報告を行いたい。

また、中世の土器の表記で、通常山茶碗と呼称されている器系無釉陶器第Ⅱ類<sup>(1)</sup>については、無釉陶器とした。なお、各遺物の型式・編年観に関しては、古墳時代の土師器は赤塚次郎氏<sup>(2)</sup>、無釉陶器・施釉陶器（古瀬戸）は藤澤良祐氏<sup>(3)</sup>、常滑窯製品は赤羽一郎氏<sup>(4)</sup>・中野晴久氏<sup>(5)</sup>、灰釉陶器は斎藤孝正氏<sup>(6)</sup>・小森俊寛氏<sup>(7)</sup>、土師器鍋は伊藤裕偉氏の見解にそれぞれ拠っている。

### 1. 遺構出土遺物

#### (1) SX3 (1～7)

すべて古墳時代前期の土師器である。1・2は二重口縁壺で、ともに平底の中央部に焼成後穿孔が認められ、外面は丁寧に磨かれている。2固体とも同形同大である。1は内外面とも部分的に赤色顔料が塗彩されている。3は瓢壺である。やや扁平な球形の体部に直線的に開く頸が付き、口縁部はほぼ直立する。4は高杯である。直線的に開く脚部にやや丸みを持って立ち上がる杯部を持つ。口縁部は横ナデによりわずかに面を持つ。5は小型器台である。器高が低くやや外反する杯部にラッパ状に広がる脚部がつく。脚部の中央よりやや下位に三方の円形透孔がみられる。6は平底壺の体下半部である。本遺構出土の土師器は赤塚編年Ⅲ段階に比定できよう。7は石杵である。外面は丁寧に研磨され、底部には赤色顔料が認められる。側面にも若干付着しているようである。断面が円筒形の棒状をなし、細く

なる一端にはくびれ部を持つ。

二重口縁壺と石杵に用いられた赤色顔料について分析の結果を若干触れておきたい。古墳時代に用いられた赤色顔料は、朱とベンガラのいずれかであることが知られているが、蛍光x線分析およびx線回折による分析の結果、2の二重口縁壺に使用されたものはベンガラ、7の石杵に使用されたものは朱であることが判明した。

#### (2) SR1 (101～105・107～120)

##### A 飛鳥～平安時代

101～105は無釉陶器の碗である。101・102・106・107は断面三角形のしっかりとした高台を持ち、体部は緩やかに口縁部に向かって立ち上がる。藤澤編年尾張型（以下、尾張型と略す。）第3型式に比定できよう。108・119は灰釉陶器の碗である。110・112はしっかりとした高台を持ち、百代寺窯式期に比定できよう。110は須恵器の杯Bである。底部と体部の境が明瞭で、体部は直線的に開く。113は黒色土器の碗A類である。横ナデされた口縁部はやや外反する。114は土師器の碗である。ロクロ成形で断面二辺三角形の高い高台を持つ。112・113・115～117は土師器の皿である。体部が緩やかに立ちあがり、口縁部がやや外反するもの（112・113・115）と体部の立ち上がりややきつ口縁部はほぼ直立するもの（116・117）とがある。

118～129は土師器の甕である。口縁部がやや内側につまみ出されるもの（118）とそのまま立ち上がるもの（119・120）とがある。

##### B 鎌倉時代中頃～室町時代 (106)

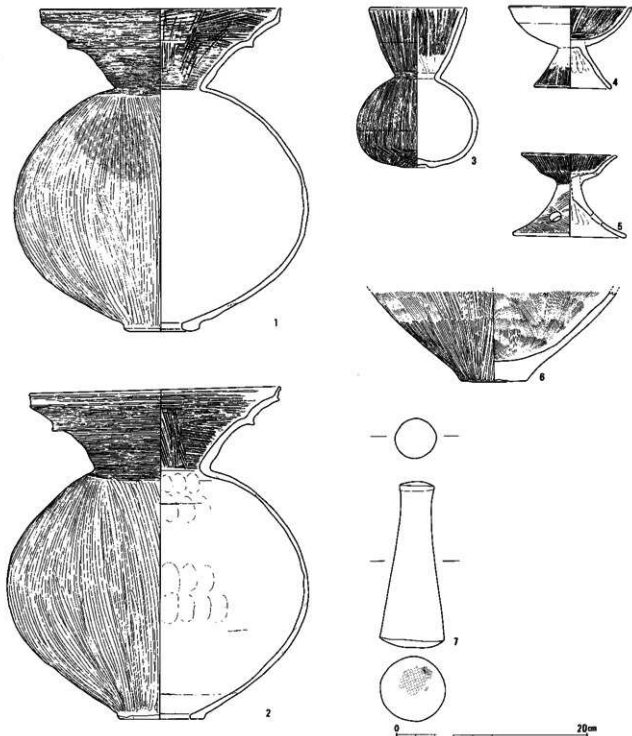
無釉陶器の碗である。瀬美・湖西型（以下、瀬美・湖西型と略す。）の第6型式に比定できよう。

#### (3) SE31 (8～15)

すべて鎌倉中頃から室町時代のものである。

8～10は無釉陶器の碗である。8・9は低い高台にモミガラ痕が顕著に残る。8は尾張型の6型式、9・10は尾張型の7型式であろう。9は高台内に墨書らしき痕跡がある。11は土師器鍋で伊藤編年第2段階（以下、～段階と略す。）に比定できよう。12～14は





第9図 出土遺物実測図(1) (1:4) SX3

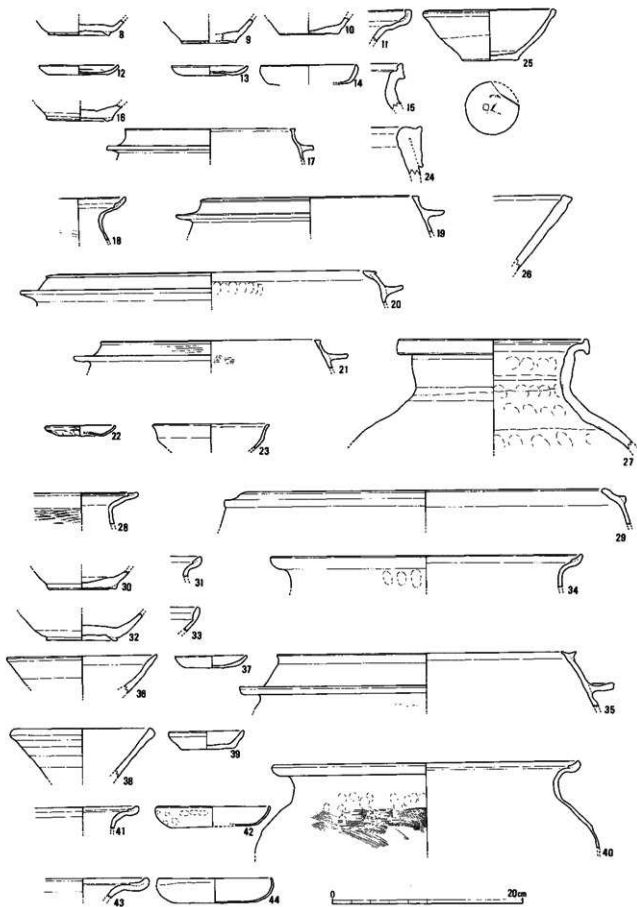
土師器の皿で、扁平なもの(12・13)と器高が高いもの(14)とがある。ともに口縁部付近は肥厚する。15は常滑窯産の甕で中野・赤羽編年6a型式(以下、~段階と略す。)であろう。

(4) SE25 (16~24)

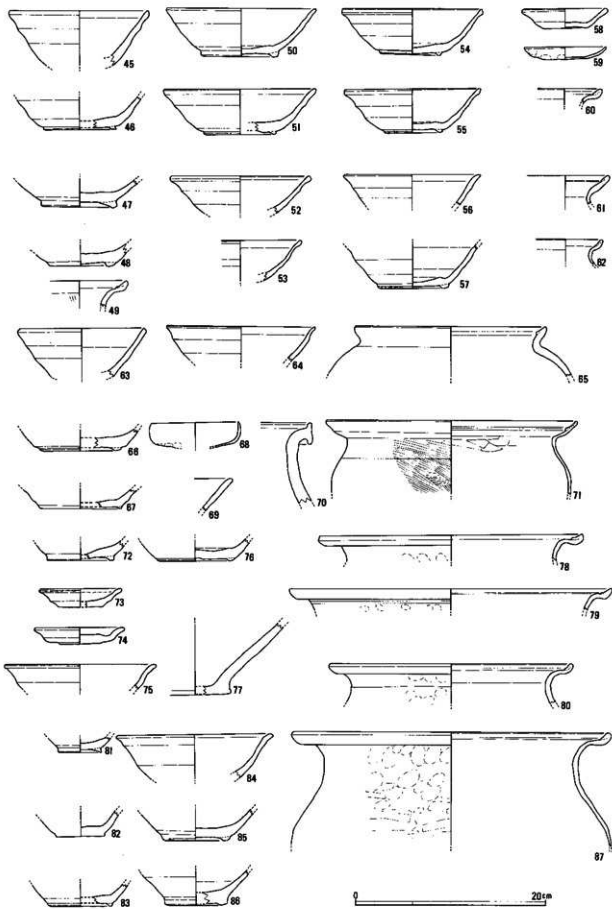
すべて鎌倉中頃から室町時代のものである。

17は無釉陶器の椀である。尾張型第6型式である。

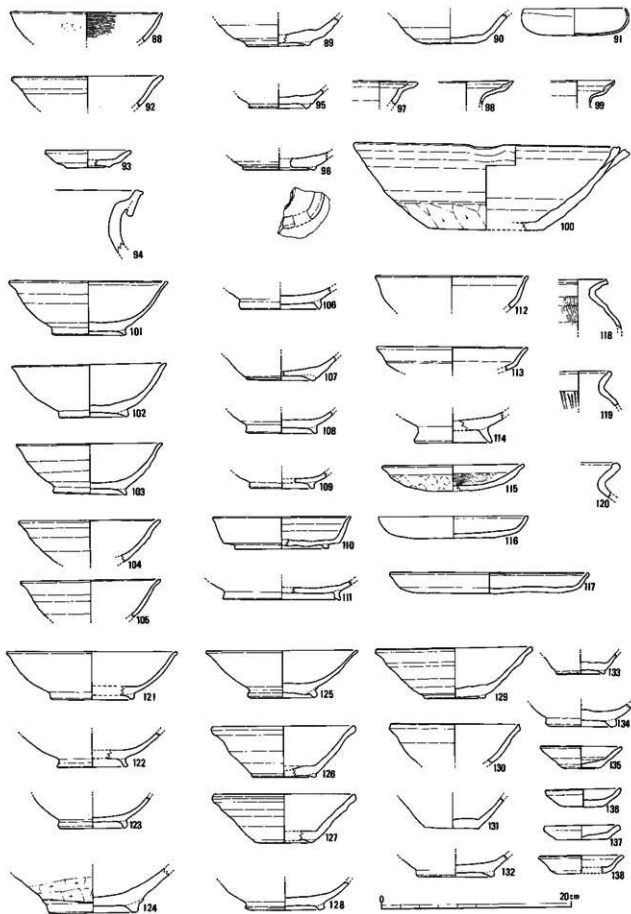
17・19~21は土師器の羽釜である。短くやや内傾する口縁部を持ち、端部上部に面をなすもの(17・19・21)と口縁部が内彎するもの(20)とがある。いずれも体部とはほぼ垂直に短い鑊がつく。前者は第1~2段階併行期、後者は第3段階併行期に相当しよう。18は土師器の鍋で、第3段階に相当しよう。22は土師器の皿である。23は土師器の椀で、体部は口縁部



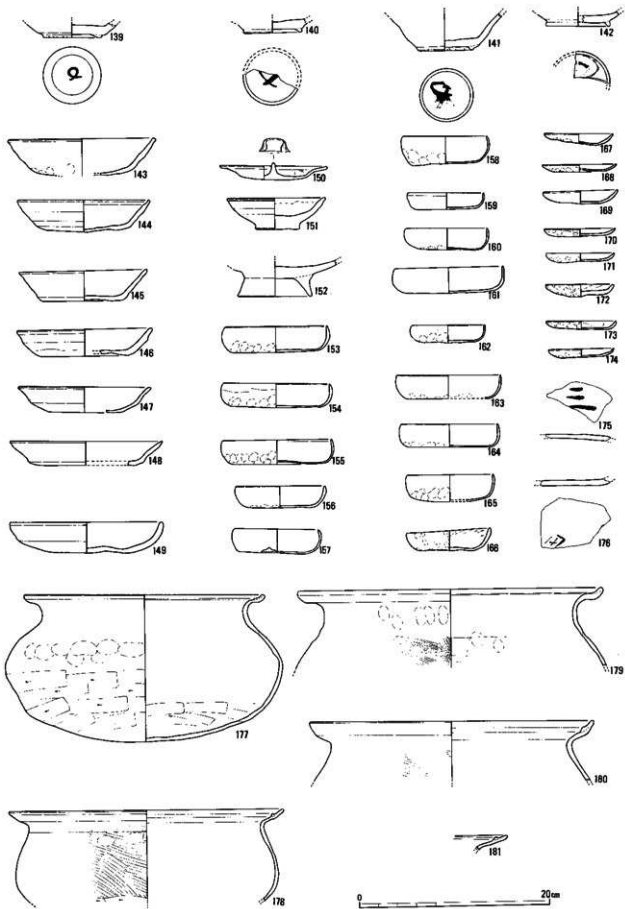
第10図 出土遺物実測図(2) (1:4) SE31・25・82・SK4・11・12・13・16・23



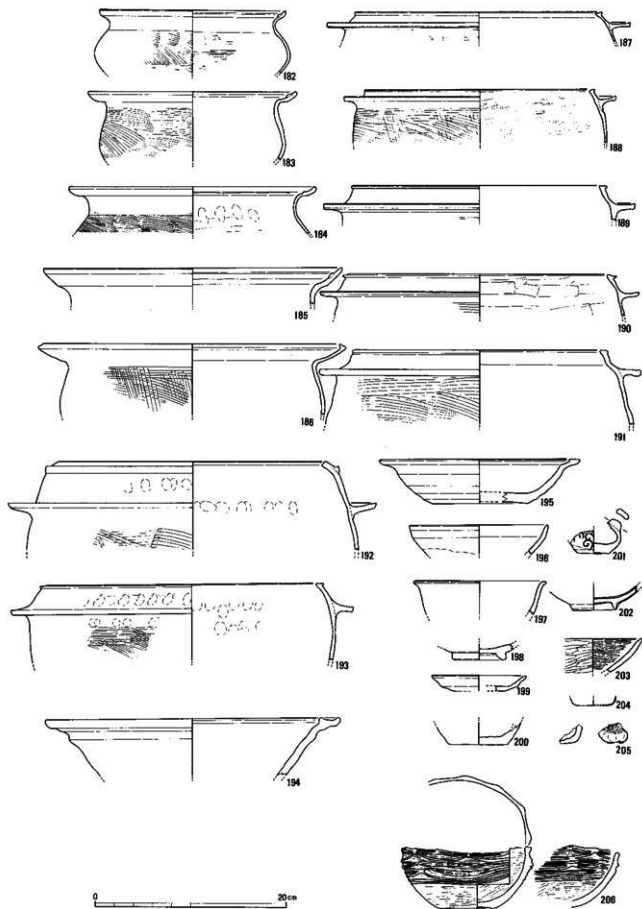
第11圖 出土遺物実測図(3) (1:4) S K 14・30・32・34・43・47・54・56~58・60・64・72



第12図 出土遺物実測図(4) (1:4) SK41・50・61・65・76・SD69・Pit・SR1・包含層



第13图 包含層 出土遺物実測図(5) (1:4)



第14图 包含層 出土遺物実測図(6) (1:4)

付近から緩やかに外反する。

(5) S E 82 (25~27)

すべて鎌倉中頃から室町時代のものである。

25は無釉陶器の椀である。無高台で直線的に開く体部にやや肥厚する口縁部を持つ。高台内底部に墨書が認められる。筆順は時計回りである。尾張型第8型式に比定できよう。26は常滑窯産の陶器のねり鉢で体部内面に「X」のヘラ記号がある。27は同じく常滑窯産の陶器の甕である。肉厚な頸部に断面N字状となる口縁部を持つ。6 a 型式に比定できよう。

(6) S K 23 (38~43)

すべて鎌倉中頃から室町時代のものである。

38は無釉陶器の椀である。直線的に開く体部にやや肥厚する口縁部を持つ。渥美・湖西型第7型式に比定できよう。39は無釉陶器の皿である。口縁部は尖り、体部は直線的である。尾張型第7型式であろう。40~42は土師器の鍋である。42は外面にハケメ調整がなされ、口縁部に横ナデによる面を持つ。第2段階に比定できよう。43は土師器の皿で、口縁部が若干肥厚し、体部外面には、指おさえ痕が顕著に残る。

(7) S K 60 (50~61)

すべて鎌倉中頃から室町時代のものである。

50~57は無釉陶器の椀である。50・51・56は低く粗雑化された高台に下方体部やや丸みを帯びて立ち上がる体部を持つ。渥美・湖西型6型式に相当しよう。52~55・57は低く粗雑化された高台に直線的に開く体部を持つ。口縁部はやや尖るようになる。尾張型6型式に比定できよう。58は無釉陶器の小皿で、直線的に開く体部に肥厚する口縁部を持つ。同じく尾張型6型式であろう。59は土師器の皿である。60・61は、土師器の鍋である。

(8) S K 54 (66~71)

すべて鎌倉中頃から室町時代のものである。66・67は無釉陶器の椀である。66は渥美・湖西型第6型式、67は尾張型第7型式に比定できよう。68は土師器の皿である。70は陶器の常滑窯産の甕で、6 a 型式であろう。71は土師器の鍋である。外面のハケメ調整が顕著に残り、体部と口縁部との境が明瞭で、口縁部の折返し部分は長く延びる。第3段階であろう。

(9) S D 69 (96)

すべて鎌倉中頃から室町時代のものである。

山茶碗の底部で、渥美・湖西型第6型式に比定できよう。底部外面の高台内を焼成前に糸切りによってえぐった様な痕跡がある。

(10) P i t (88~90)

すべて鎌倉中頃から室町時代のものである。

88は瓦器の椀で、まっすぐに立ちあがる口縁部内面に沈線が認められる。89・90は無釉陶器の椀の底部である。

2 包含層 (121~206)

A 縄文時代の遺物 (206)

S R 1の中央部上の包含層から出土した縄文土器の浅鉢である。内外面ともに丁寧に研磨され、底部は上げ底状になっており、丁寧に製作されたことが窺われる。口縁部直下に浮線網条文が施されている。内外面ともに、黒色に磨かれた部分が認められ、内面には胎土中に多量の雲母が混入している。時期は縄文時代晩期の火洞A式に比定されよう。

B 平安時代 (121~123・142~152)

121~123・142は灰釉陶器の椀である。いずれも断面三角形のしっかりとした高台を持ち、体部は開き気味に立ち上がり、121の口縁部はやや外反する。142の底部高台内には墨書が認められる。いずれも百代寺窯式期に比定できよう。143~149は土師器の皿である。器高が高く、体部は直線的に開くもの(143~145)器高が低く、体部がやや外側に開き気味に立ち上がるもの(146~148)、器高が低く、体部が丸みを帯び、口縁部が内彎するもの(149)がある。151・152は土師器の椀である。ロクロ成形で、断面三角形の高い高台を持つ。

B 鎌倉時代中頃~室町時代 (124~141・153~174・177~203)

124~141は無釉陶器である。124は鉢、128~134・139~141は椀である。いずれも底部外面の高台内に墨書がみられる。筆順は141は定かではないが、他の二つは時計回りであると思われる。いずれも第6型式の渥美・湖西型に比定できよう。135~138は皿である。体部がほぼ直線的に開くもの(135・136)とやや外側に開くもの(137・138)とがある。150は土師器の蓋で、体部は底部中央部のつまみ部から

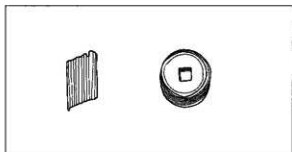
口縁部にかけて緩やかに開く。153～174は土師器の皿である。口縁部はほぼ直立するものがほとんどで器高が高く体部は底部から内彎気味に立ち上がるもの(153～165)と器高が低く、体部は開き気味に立ち上がるもの(166～174)とがある。177～186は土師器の鍋である。177は外面が工具ナデとオサエで調整され、口縁端部を丸くおさめている。第1段階に相当できよう。178～185は外面がハケメで調整がされ、口縁部に横ナデが施されるようになる第2・3段階に相当しよう。186は器壁が薄く、口縁部が内側に屈曲するもので第4段階であろう。187～191は土師器の羽釜である。187～191・193は体部と垂直に鈎がつき、短くやや内傾する口縁部を持つもので、189・191・193は口縁端部がやや外側に引き出されている。第1・2段階併行期のものであろう。192は口縁部が直立し、端部は内傾する。第3段階併行期のものであろう。194・195は施釉陶器の折縁深皿で体部は直線的に開き、口縁部は外折する。194は古瀬戸後期様式期、195は中期末～後期様式期に相当しよう。196・198は施釉陶器の平碗である。196は体部は直線的に開くが、口縁部付近でやや立ち上がり気味になる。内外面ともに灰釉が施される。ともに古瀬戸後期様式期に相当しよう。199は施釉陶器の緑釉小皿である。無高台で直線的に立ちあがる体部の内面には灰釉が施される。古瀬戸後期様式期に相当しよう。200は施釉陶器の双耳小壺か水注と考えられるものの底部である。無高台の底部には糸切り痕が残し、内外面に灰釉が施される。古瀬戸後期様式期か。201は施釉陶器の水滴である。底部には糸切り痕が残し、ロクロナデされた体部の口縁部付近には、蕨手文が灰釉で施される。古瀬戸中期様式期か。197・202は青磁の碗である197は体部は緩やかに開き、玉縁状になる口縁部はやや外反する。203は瓦器の碗である。体部は直線的で、口縁端部には沈線が認められる。

#### D 時期不明 (175・176・204・205)

175・176は土師器の恐らく皿の一部であろう。175は「三」、176は「田」の様な墨書がある。204は銅製の小皿、205は手づくねによる鳥形の土製品の下半部分である。

### 3. 銭貨 (207～253)

今回の調査で検出された銭貨は全部で47枚である。その内、遺構から出土したものは6枚で残りは遺構外からの出土である。すべて裏面は無紋で、中国銭である。種類別の内訳は、皇宋通寶が最多で、13枚、紹聖元寶4枚、元豊通寶5枚、開元通寶・天聖元寶・寧元寶が3枚、天禧通寶・治平元豊・元祐通寶が2枚、景德元寶・祥符通寶・嘉祐通寶・紹元寶が1枚、不明5枚となっている。また、217・216・219～223・231・232・241・242・248の12枚は調査区中央の東壁寄りの包含層中から、重なって出土した。(第15図参照)



第15図 銭貨出土状況 実測図 (1:2)

#### 4. 土鍾 (254～275)

今回の調査で出土した土鍾は遺構外からの出土がほとんどであるので、所属時期が明らかなものは少ない。22点という少ない資料ではあるが形態別に分類を試みたい。形態別の土鍾の分類に関しては、愛知県の大淵遺跡で詳述されており、その分類に一部付け加えた形で行った。<sup>(17)</sup>

形態A：真っ直ぐな円筒形を特徴とするもの

A1：大型のもの (254～261)

A2：極めて小型のもの (268～270)

形態B：中央部に最大径を持つ紡錘形を特徴とするもの (262～265)

形態C：細長い紡錘形を特徴とするもの。

C1：丸みの強いもの (271～274)

C2：細長いもの (275)

形態D：ほぼ完全な球体形を特徴とするもの (266・267)

形態Dは、大淵遺跡からは出土しておらず、今回付け加えたものである。外面の調整は、A1をはじめとする大型のものに、指押さえ痕が顕著である傾向がみられる。材質はすべて土師質で、須恵質のものはみられなかった。



## 5. 砥石 (276~289)

今回の調査で出土した砥石は全部で12点である。石材によって、荒砥、中砥、仕上げ砥に区分される。砂岩は荒砥や中砥、デイ岩は仕上げ砥に使用されたと思われる。277・278・282・283は前者で、残りは後者に対応できよう。前者は形態に規格性が認められ、短冊型でそれぞれの辺の稜線が明確である。後者は形態的には不統一であり、管状の溝をもつもの(276・277・287)などがみられる。

## 6. 加工円盤 (290~300)

今回の調査で出土した、陶磁器片の周囲を二次的に加工し、円盤状に仕上げたものを「加工円盤」と呼称する。当遺跡でそれと判断したものは全部で11点である。遺構から出土したものは298の1点のみで残りはすべて、遺構外からの出土である。愛知県土田遺跡からは、相当量の加工円盤が出土しており、A・B・Cの3類に分類されている<sup>(8)</sup>。また、三重県における出土状況については、山崎恒哉氏が、「円形加工陶磁製品」として近畿自動車道関連調査の事例について、分類、報告している<sup>(9)</sup>。これらの分類を参考にしつつ、以下の3類に分類した。

A類：無軸陶器の碗・皿を素材にしたもの。

A 1類：高台部を利用したもの。(293・294)

A 2類：高台部をそのまま利用したもの(290~292)

B類：施釉陶器(常滑窯製品を含む)を素材にしたもの(295~298)

C類：磁器を素材にしたもの(299・300)

製作技法については、側面を研磨したものはみられず、すべて打製加工によるものである。A 2類については、土田遺跡からは出土していないようである。また、山崎氏は高台付き底部のものを利用したものを「加工高台」と呼称し、加工円盤と区別している。A 2類の内291・292は高台のない底部をそのまま利用したもので、山崎氏の報告では見られないようである。

## 【註】

- (1) 植崎彰一「中世の社会と陶器生産」(『世界陶磁全集3 日本中世』小学館、1977年)。
- (2) 赤塚次郎「廻淵遺跡」(財団法人 愛知県埋蔵文化財センター、1990年)。
- (3) 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター、1994年)。  
藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」(『財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム 古瀬戸をめぐる中世陶器の世界〜その生産と流通〜 資料集』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター、1996年)。
- (4) 赤羽 一郎・中野晴久「生産地における編年について」(『全国シンポジウム 中世常滑焼』(『資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所、1994年)。
- (5) 斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産—猿投窯を中心に—」(『古代の土器研究会 第3回シンポジウム 古代の土器研究—律令的 土器様式の西東3』 古代の土器研究会、1994年)。
- (6) 伊藤裕伸「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Miehistory』vol. 1 三重歴史文化研究会、1990年)。  
伊藤裕伸「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」(『研究紀要 第1号』三重県埋蔵文化財センター、1992年)。
- (7) 宮腰健司・古橋佳子「2. 大淵遺跡出土の土師について」(『大淵遺跡』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター、1991年)。
- (8) 赤塚美智代「第5章考察 4 加工円盤」(『土田遺跡』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター、1987年)。
- (9) 山崎恒哉「(付) 円形加工陶磁製品について」(『近畿自動車道(勢和〜伊勢)埋蔵文化財発掘調査概報』VI) 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1990)。



207



208



209



210



211



212



213



214



215



216



217



218



219



220



221



222



223



224



225



226



227



228



229

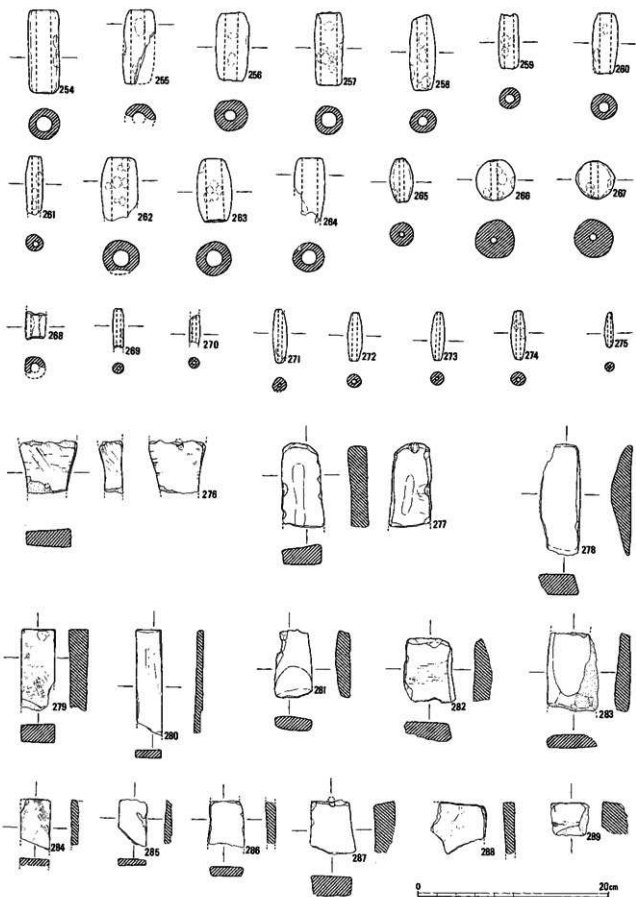


230

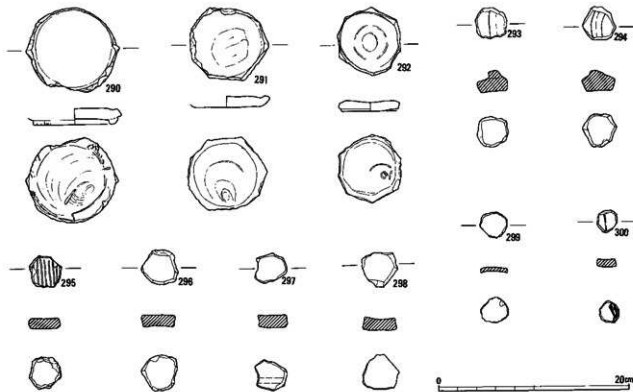
第16圖 出土錢實拓影(1) (1:1)



第17圖 出土錢實拓影(2) (1:1)



第18圖 出土土鏟・砾石 実測圖 (1:4)



第19図 出土加工円盤 実測図 (1:4)

番号	器種	計測値			調査・出土等の特徴		色調	1層部残存率	出土位置	登録番号	
		口径	底径	器高	内	外					
1	土師器	二重口縁壺	25.0	6.0	34.2	ミガキ・口縁部付近に朱付着	ミガキ・底部に横穴状穿孔後縁部か、踵部・胴部に朱に朱付着	浅黄褐色・にぶい褐色	11/12	SK3	060-01
2	土師器	二重口縁壺	26.0	9.0	35.4	ミガキ	ミガキ・底部に横穴状穿孔後縁部か、踵部・胴部に朱に朱付着	浅黄褐色・褐色	12/12	SK3	059-01
3	土師器	瓶	10.4		16.9	ミガキ・土器ナデ	ナデ・ミガキ	浅黄褐色	6/12	SK3	004-03
4	土師器	高杯	13.1	8.0	8.6	ミガキ・土器ナデ・シボリ痕	ナデ・ミガキ・1層部ヨコナデ	にぶい褐色	6/12	SK3	004-01
5	土師器	小形器台	10.2	11.9	8.7	ミガキ・土器ナデ・シボリ痕	ナデ・ミガキ・1層部ヨコナデ	褐色	4/12	SK3	004-02
6	土師器	平底壺		6.9		ハケメ (5cm/1cm)	ハケメ後ミガキ・底部未調査	にぶい褐色		SK3	005-01
7	石片	最大長 17.6 最大幅 6.8					ミガキ・底部に朱付着	灰オリーブ色		SK3	062-01
8	無輪陶器	瓶		6.4		ロクロナデ	ロクロナデ・底部未切り・高台筋付後ナデ・モミガラ痕	灰白色	12/12	SE31	051-06
9	無輪陶器	瓶		5.7		ロクロナデ	ロクロナデ・底部未切り・高台筋付後ナデ・モミガラ痕	灰白色	4/12	SE31	052-06
10	無輪陶器	瓶		6.0		ロクロナデ	ロクロナデ・底部未切り	灰白色	4/12	SE31	002-08
11	土師器	鉢				口縁部ヨコナデ		灰白・灰褐色		SE31	003-03
12	土師器	皿	8.4	6.0	1.0	ナデ・オサエ・1層部ヨコナデ	ナデ・オサエ	灰白色	2/12	SE31	002-06
13	土師器	皿	8.0	5.0	1.0	ナデ・1層部ヨコナデ	ナデ・オサエ	灰白色	2/12	SE31	002-05
14	土師器	皿	10.2			ナデ・口縁部ヨコナデ	ナデ	灰白色	2/12	SE31	002-04
15	陶器	壺			6.9	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい赤褐色		SE31	003-06
16	無輪陶器	瓶			6.9	ロクロナデ	ロクロナデ・底部未切り・高台筋付後ナデ・モミガラ痕	灰白色	12/12	SE25	002-07
17	土師器	附釜	17.9	肩径 21.4		ナデ	ナデ・オサエ	灰白・褐色	2/12	SE25	002-05
18	土師器	瓶				ナデ・オサエ	ナデ・オサエ・ハケメ	灰白・灰褐色		SE25	003-02
19	土師器	附釜	23.0	肩径 28.0		ナデ・1層部ヨコナデ	ナデ・オサエ	灰白・褐色		SE25	008-02
20	土師器	瓶	23.0	肩径 28.0		ナデ	ナデ・オサエ	灰白・灰褐色	1/12	SE25	002-01
21	土師器	附釜	23.0	肩径 28.0		ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	灰白・褐色	2/12	SE25	002-02
22	土師器	壺	7.2	4.3	1.1	ナデ・1層部ヨコナデ	オサエ	灰白色	11/12	SE62	020-07
23	土師器	瓶	12.0			ナデ・ケスリ	ナデ・ハケメ・(6cm/1cm)	灰白・灰褐色		SE62	020-03
24	陶器	壺				ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい赤褐色		SE62	003-05
25	無輪陶器	瓶	14.0	5.6	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ・底部未切り・底部に横溝	灰白色	1/12	SE62	019-03
26	無輪陶器	鉢				ロクロナデ・ヘラ記号あり	ロクロナデ・オサエ	にぶい赤褐色		SE62	019-02
27	陶器	壺	20.1			ロクロナデ・オサエ・粘土線合痕あり		にぶい赤褐色	3/12	SE62	019-01
28	土師器	瓶				ナデ・口縁部ヨコナデ	ナデ・ハケメ・(4cm/1cm)	浅黄褐色		SE62	006-03
29	土師器	瓶	39.0			ナデ・オサエ・口縁部ヨコナデ	ナデ・ハケメ・(2cm/1cm)	浅黄褐色	1/12	SK4	008-01
30	無輪陶器	瓶		6.8		ロクロナデ	ロクロナデ・底部未切り・高台筋付後ナデ・モミガラ痕	灰白色		SK11	017-08
31	土師器	瓶				ナデ	ナデ・オサエ	にぶい赤・黄褐色		SK11	018-05
32	無輪陶器	瓶		7.5		ロクロナデ	ロクロナデ・底部未切り・高台筋付後ナデ	灰白色		SK11	046-01
33	土師器	瓶				ナデ	ナデ	土褐色・浅黄褐色		SK12	018-05
34	土師器	瓶	33.0			ナデ・口縁部ヨコナデ	ナデ・オサエ・ス付着	土褐色・浅黄褐色	0/12	SK13	007-05
35	土師器	附釜	31.5			ナデ・口縁部ヨコナデ	ナデ・ハケメ・ス付着	浅黄褐色	1/12	SK16	006-07

第1表 出土遺物観察表 (1)

番号	器 種	計 測 値			調 査 ・ 輸 送 等 の 特 徴		色 調	口縁部 残存率	出土位置	登録番号
		口径	底径	器高	内	外				
25	無輪陶器	輪	15.7			口口ナデ	口口ナデ	灰白色	SK23	045-05
27	土師器	皿	7.4	2.8	1.3	ナデ	ナデ	にぶい・黄褐色	6/12	SK23 017-07
38	無輪陶器	瓶	15.2			口口ナデ	口口ナデ	灰白色	4/12	SK23 009-01
39	無輪陶器	瓶	8.0	5.6	2.9	口口ナデ	口口ナデ・底部糸切り・底部にユビオサエ	灰色	9/12	SK23 025-03
40	土師器	罎	23.0			ナデ・口縁部ヨコナデ	ナデ・ハケム(底1cm)・オサエ	灰白・褐色	3/12	SK23 048-01
41	土師器	罎				ナデ・口縁部ヨコナデ	ナデ・オサエ	灰白・灰白色	0/12	SK23 066-04
42	土師器	罎	12.2	8.6	2.2	ナデ	ナデ・オサエ	灰白色	12/12	SK23 069-03
43	土師器	罎				ナデ・口縁部ヨコナデ	ナデ	淡黄褐色	0/12	SK23 068-02
44	土師器	罎	12.0	8.4	2.6	ナデ・口縁部ヨコナデ	ナデ・オサエ	淡黄褐色	4/12	SK23 047-01
45	無輪陶器	瓶	12.0			口口ナデ	口口ナデ	灰白色	3/12	SK14 047-04
46	無輪陶器	瓶		8.0		口口ナデ	口口ナデ・高台筋付後ナデ・モミダウ丸	灰白色		SK14 047-07
47	無輪陶器	瓶		8.0		口口ナデ	口口ナデ・高台筋付後ナデ	灰白色		SK14 046-04
48	無輪陶器	瓶		7.0		口口ナデ	口口ナデ・高台筋付後ナデ	灰白色		SK14 047-02
49	土師器	罎				ナデ・口縁部ヨコナデ	ナデ	橙・にぶい・褐色	0/12	SK14 047-03
50	無輪陶器	瓶	15.8	7.3	5.1	口口ナデ	口口ナデ・底部糸切り・高台筋付後ナデ	灰白色	12/12	SK60 025-04
51	無輪陶器	瓶	16.0	7.6	4.8	口口ナデ	口口ナデ・高台筋付後ナデ	灰白色	4/12	SK60 010-02
52	無輪陶器	瓶	14.8			口口ナデ	口口ナデ	灰白色	2/12	SK60 010-04
53	無輪陶器	瓶	12.9			口口ナデ	口口ナデ	灰白色	1/12	SK59 052-05
54	無輪陶器	瓶	14.4	6.4	4.3	口口ナデ・自然釉	口口ナデ・底部糸切り・高台筋付後ナデ・モミダウ丸・自然釉	灰白色	8/12	SK59 061-01
55	無輪陶器	瓶	14.2	6.2	4.7	口口ナデ・自然釉	口口ナデ・底部糸切り・高台筋付後ナデ・モミダウ丸・自然釉	灰白色	2/12	SK59 051-02
56	無輪陶器	瓶	12.0			口口ナデ	口口ナデ	灰白色	2/12	SK59 052-04
57	無輪陶器	瓶	6.2			口口ナデ・自然釉	口口ナデ・底部糸切り・高台筋付後ナデ・モミダウ丸・自然釉	灰白色	6/12	SK59 051-05
58	無輪陶器	皿	9.1	2.3	2.1	口口ナデ	口口ナデ	灰白色	7/12	SK59 052-01
59	土師器	皿	8.7	2.4	1.3	ナデ・口縁部ヨコナデ	ナデ・オサエ	淡黄褐色	3/12	SK59 052-03
60	土師器	罎				ヨコナデ	ヨコナデ・スス付着	灰褐色	9/12	SK60 013-04
61	土師器	罎				ヨコナデ	ヨコナデ・スス付着	灰白色	0/12	SK59 052-02
62	土師器	罎				ヨコナデ	ヨコナデ・オサエ	にぶい・褐色	0/12	SK58 012-02
63	無輪陶器	瓶	13.4			口口ナデ・自然釉	口口ナデ	灰白色	1/12	SK15 016-05
64	無輪陶器	瓶	15.5			口口ナデ	口口ナデ	灰白・褐色	1/12	SK30 049-04
65	土師器	罎	20.0			ナデ・口縁部ヨコナデ	ナデ	淡黄褐色	3/12	SK30 047-06
66	無輪陶器	瓶		7.4		口口ナデ	口口ナデ・口口ナズリ・底部糸切り・高台筋付後ナデ・モミダウ丸	灰白・灰色	3/12	SK54 048-06
67	無輪陶器	瓶		8.4		口口ナデ	口口ナデ・底部糸切り・高台筋付後ナデ	灰白色		SK54 050-05
68	土師器	皿	9.2			ナデ	オサエ	灰白色	3/12	SK54 056-03
69	無輪陶器	瓶				口口ナデ	口口ナデ	灰白色	0/12	SK54 058-03
70	海苔	罎				口口ナデ	口口ナデ	灰褐色	0/12	SK54 057-02
71	土師器	罎	26.3			ナデ・口縁部ヨコナデ	ハケム・(底1cm)・スス付着	灰褐色	2/12	SK54 056-02
72	無輪陶器	瓶		7.0		口口ナデ・自然釉	口口ナデ・口口ナズリ・底部糸切り・高台筋付後ナデ・モミダウ丸	灰白色		SK47 058-06
73	無輪陶器	皿	8.7	4.6	1.9	口口ナデ	口口ナデ・底部糸切り・口縁部に自然釉	灰白色	3/12	SK47 011-05
74	無輪陶器	皿	9.2	4.4	1.7	口口ナデ・底部にユビオサエ	口口ナデ・底部糸切り	灰白色	11/12	SK43 058-07
75	無輪陶器	瓶	16.0			口口ナデ	口口ナデ	灰白色	0/12	SK72 011-04
76	無輪陶器	瓶		7.2		口口ナデ	口口ナデ・高台筋付後ナデ	灰白色		SK64 011-03
77	無輪陶器	罎				口口ナデ	口口ナデ・底部糸切り	にぶい・灰褐色		SK64 051-03
78	土師器	罎	28.0			口縁部ヨコナデ	ヨコナデ・オサエ・スス付着	灰白色	1/12	SK64 013-01
79	土師器	罎	34.0			口縁部ヨコナデ	オサエ・ナデ	にぶい・黄褐色	0/12	SK32 049-01
80	土師器	罎	25.5			ナデ・口縁部ヨコナデ	オサエ・ナデ	にぶい・褐色	2/12	SK57 058-01
81	無輪陶器	瓶		4.5		口口ナデ	口口ナデ・底部糸切り・高台筋付後ナデ	灰白色		SK58 011-01
82	無輪陶器	瓶		5.1		口口ナデ	口口ナデ・底部糸切り	灰白色		SK31 060-03
83	無輪陶器	瓶		6.7		口口ナデ・自然釉	口口ナデ・高台筋付後ナデ・モミダウ丸	灰褐色		SK56 068-05
84	無輪陶器	瓶		16.0		口口ナデ	口口ナデ	灰白色	2/12	SK57 058-02
85	無輪陶器	瓶		7.0		口口ナデ・自然釉	口口ナデ・高台筋付後ナデ・モミダウ丸	別な灰褐色		SK57 058-04
86	無輪陶器	瓶	6.6			口口ナデ・自然釉	口口ナズリ	灰白色		SK57 057-01
87	土師器	罎	33.0			ナデ・口縁部ヨコナデ	オサエ・ナデ・ケズリ	にぶい・黄褐色		SK57 056-01
88	瓦葺	罎	16.0			ハケム・オサエ	口口ナデ	褐色	1/12	PK 045-05
89	無輪陶器	瓶		6.3		口口ナデ	口口ナデ・底部糸切り・高台筋付後ナデ	灰白色		PK 045-06
90	無輪陶器	瓶		6.0		口口ナデ	口口ナデ・底部糸切り	灰白色		PK 010-05
91	土師器	罎	10.8	6.5	2.8	ナデ・口縁部ヨコナデ	オサエ・口縁部付込(軌)・縦合	灰白色	12/12	SK30 025-01
92	無輪陶器	瓶	15.4			口口ナデ	口口ナデ	灰白色	1/12	SK41 045-03
93	無輪陶器	皿	8.8	4.4	1.8	口口ナデ・自然釉	口口ナデ・底部糸切り	灰白色	2/12	SK41 050-04
94	海苔	罎				口口ナデ	口口ナデ	にぶい・黄褐色	0/12	SK41 034-05
95	無輪陶器	瓶		6.5		口口ナデ	口口ナデ・底部糸切り・高台筋付後ナデ	灰白色		SK61 051-04
96	無輪陶器	瓶		7.2		口口ナデ	口口ナデ・底部糸切り・高台筋付後ナデ	灰白色		SK69 011-02
97	海苔	折縁深皿				口口ナデ	口口ナデ	灰白・灰より一色	0/12	SK65 011-06
98	土師器	罎				ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい・黄褐色	0/12	SK78 013-05
99	土師器	罎				ヨコナデ	ヨコナデ・スス付着	にぶい・黄褐色・灰褐色	0/12	SK50 013-03
100	無輪陶器	鉢	28.2	12.0	9.0	口口ナデ	口口ナデ・ハラケズリ	灰白色	2/12	SK62 010-01
101	無輪陶器	瓶	16.5	7.5	5.7	口口ナデ・自然釉	口口ナデ・高台筋付後ナデ	灰白色	2/12	SK1 045-01
102	無輪陶器	瓶	16.0	6.9	5.5	口口ナデ・自然釉	口口ナデ・底部糸切り・高台筋付後ナデ	灰白色	2/12	SK1 048-02
103	無輪陶器	瓶	15.3	7.8	5.3	口口ナデ	口口ナデ・底部糸切り・高台筋付後ナデ	灰白色	12/12	SK1 022-03
104	無輪陶器	瓶	14.7			口口ナデ	口口ナデ	灰白色	2/12	SK1 045-02
105	無輪陶器	瓶	14.8			口口ナデ	口口ナデ	灰白色	1/12	SK1 045-03

第2表 出土遺物観察表(2)

番号	器種	寸法		重量	調査・発見等の経緯		色調	口縁部 残存率	出土位置	登録番号	
		口径	底径		内	外					
106	無釉陶器	楕	8.3		ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼付後ナデ・底部クワズリ	灰白色		SR1	006-06	
107	無釉陶器	楕	7.5		ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼付後ナデ・底部クワズリ	灰白色		SR1	046-02	
108	無釉陶器	楕	7.2		ロクロナデ	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	灰白色		SR1	045-04	
109	灰釉器	楕	7.0		ロクロナデ	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	淡黄色		SR1	046-05	
110	灰釉器	杯	13.0	9.2	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼付後ナデ・底部クワズリ	灰白色	2/12	SR1	007-01
111	灰釉陶器	楕	12.5			ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼付後ナデ・底部クワズリ	にぶい黄褐色		SR1	007-02
112	土師器	皿	16.0			ナデ・11線部ヨコナデ	ナデ	灰白色	2/12	SR1	023-02
113	土師器	皿	16.0			ナデ・11線部ヨコナデ	ナデ	褐色	1/12	SR1	006-01
114	土師器	楕	8.0			ナデ	ロクロナデ・高台貼付後ナデ・底部クワズリ	淡黄褐色		SR1	048-03
115	土師器	皿	15.0	2.9	2.8	11線ナデ・11線部ヨコナデ	ナデ	淡黄褐色	1/12	SR1	043-07
116	土師器	皿	16.0	4.0	2.3	11線ナデ・ナデ	11線ナデ・ナデ	褐色	1/12	SR1	017-04
117	土師器	皿	21.2	8.2	2.2	ナデ・11線部ヨコナデ	ナデ・オサエ	にぶい黄褐色	3/12	SR1	045-05
118	土師器	壺				ナデ	ナデ・ハケメ (6本/1cm)	にぶい黄褐色・淡黄色		SR1	018-02
119	土師器	壺				ナデ	ナデ・ハケメ (4本/1cm)	にぶい黄褐色・淡黄色		SR1	018-01
120	土師器	壺				ナデ	ナデ	にぶい黄褐色		SR1	060-02
121	灰釉陶器	楕	17.2	9.6	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼付後ナデ・自然釉	灰白色	2/12	包含層	006-04
122	灰釉陶器	楕	7.4			ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼付後ナデ	灰白色		包含層	035-04
123	灰釉陶器	楕	7.2			ロクロナデ・自然釉	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	灰白色		包含層	035-03
124	無釉陶器	楕	9.0			ナデ	ナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	灰白色		包含層	054-03
125	無釉陶器	楕	16.0	6.6	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	灰白色	1/12	包含層	028-03
126	無釉陶器	楕	14.8	6.5	5.4	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	灰白色	1/12	包含層	054-02
127	無釉陶器	楕	14.8	5.7	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼付後ナデ・モミガク	灰白色	2/12	包含層	043-03
128	無釉陶器	楕	8.3			ロクロナデ	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	灰白色		包含層	043-04
129	無釉陶器	楕	16.4	6.4	5.4	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	灰白色	4/12	包含層	031-01
130	無釉陶器	楕	13.3			ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色	5/12	包含層	023-03
131	無釉陶器	楕	8.7			ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	灰白色		包含層	054-04
132	無釉陶器	楕	8.3			ロクロナデ・自然釉	ロクロナデ・高台貼付後ナデ・モミガク	灰白色		包含層	043-01
133	無釉陶器	楕	4.7			ロクロナデ	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ・モミガク	灰白色		包含層	016-03
134	無釉陶器	楕	7.6			ロクロナデ	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	灰白色		包含層	043-02
135	無釉陶器	皿	8.2	3.4	2.4	ロクロナデ	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	灰白色	2/12	包含層	016-01
136	無釉陶器	皿	8.0	4.3	1.9	ロクロナデ	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	灰白色	1/12	包含層	049-01
137	無釉陶器	皿	7.8	5.2	1.5	ロクロナデ・自然釉	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	灰白色	1/12	包含層	023-01
138	無釉陶器	皿	8.4	4.8	1.9	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色	1/12	包含層	016-02
139	無釉陶器	楕	6.0			ロクロナデ	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	灰白色		包含層	023-04
140	無釉陶器	楕	5.5			ナデ	ナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ・モミガク	灰白・灰ナリープ色		包含層	028-06
141	無釉陶器	楕				ロクロナデ	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ・モミガク	灰黄・淡黄色		包含層	049-02
142	灰釉陶器	楕	7.0			ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼付後ナデ	淡黄色		包含層	046-06
143	土師器	皿	15.6	9.2		ナデ・11線部ヨコナデ	ヨコナデ・オサエ	黄・淡黄褐色	3/12	包含層	010-02
144	土師器	皿	13.8	8.0	3.3	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・底部ナデ	黄褐色・淡黄褐色	5/12	包含層	007-04
145	土師器	皿	13.7	9.0	3.2	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	黄褐色	12/12	包含層	025-02
146	土師器	皿	14.0	4.5	2.8	ナデ・ヨコナデ・11線部ヨコナデ	ナデ・オサエ・底部オサエ	褐色	3/12	包含層	031-06
147	土師器	皿	13.6	7.6	3.7	ナデ・11線部ヨコナデ	ナデ	褐色	2/12	包含層	015-06
148	土師器	皿	16.0	8.5	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ・底部ナデ・オサエ	にぶい褐色	1/12	包含層	017-05
149	土師器	皿	16.1	4.1	3.3	オサエ・ナデ・11線部ヨコナデ	ナデ・オサエ	淡黄褐色	8/12	灰土	001-01
150	土師器	皿	11.4	6.8	1.5	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	淡黄褐色	2/12	包含層	009-04
151	土師器	皿	10.5	4.8	3.3	ロクロナデ・11線部に施釉	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	淡黄色・淡灰色	1/12	包含層	013-03
152	土師器	楕	7.6			ロクロナデ	ロクロナデ・底部ナデ・高台貼付後ナデ	灰白色		包含層	054-01
153	土師器	楕	10.5	9.0	2.8	ナデ	ナデ・オサエ	灰白色	12/12	包含層	015-03
154	土師器	楕	11.2	9.6	2.6	ナデ	ナデ・オサエ	灰白色	6/12	包含層	015-02
155	土師器	楕	11.4	9.8	2.9	ナデ	ナデ・オサエ・底部ナデ後ナデ	淡黄色	12/12	包含層	015-01
156	土師器	楕	9.5	7.6	2.4	ナデ	ナデ・オサエ	灰白色	9/12	包含層	040-05
157	土師器	楕	8.7	7.2	2.5	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	灰白色	12/12	包含層	054-05
158	土師器	楕	9.8	8.0	3.1	ナデ・ヨコナデ	ナデ・オサエ	灰白色	3/12	包含層	035-01
159	土師器	楕	8.0	6.4	1.8	ナデ・ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	淡黄褐色	10/12	包含層	054-07
160	土師器	楕	8.6	6.8	2.3	ナデ	ナデ・オサエ	灰白色	8/12	包含層	040-06
161	土師器	楕	11.5	9.2	2.6	ナデ	ナデ・オサエ	淡黄褐色	12/12	包含層	006-02
162	土師器	楕	7.6	7.6	1.9	ナデ	ナデ・オサエ	淡黄褐色	12/12	包含層	034-02
163	土師器	楕	11.0	7.8	2.5	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	淡黄褐色	3/12	包含層	017-06
164	土師器	楕	10.0	8.5	2.5	ナデ	ナデ・オサエ	淡黄褐色	1/12	包含層	043-05
165	土師器	楕	9.0	8.0	2.9	ナデ	ナデ・オサエ後ナデ	灰白色	3/12	包含層	035-01
166	土師器	楕	8.8	5.2	2.1	11線ナデ	ナデ・オサエ	にぶい黄褐色・淡黄褐色	8/12	包含層	028-01
167	土師器	楕	7.8	4.8	1.2	ナデ	オサエ	灰白色	5/12	包含層	040-07
168	土師器	楕	7.8	5.6	0.8	ナデ	オサエ	灰白色	4/12	包含層	015-05
169	土師器	楕	7.6	2.4	1.4	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	灰白色	9/12	包含層	054-06
170	土師器	楕	7.4	5.0	0.9	ナデ	オサエ	灰白色	12/12	包含層	034-03
171	土師器	楕	7.2	4.8	0.9	ナデ	ナデ・オサエ	灰白・淡黄褐色	12/12	包含層	017-03
172	土師器	楕	6.8	4.8	0.9	ナデ・クワズリ	オサエ・ナデ	灰白・淡黄色	3/12	包含層	028-01
173	土師器	楕	7.2	5.8	0.8	ナデ	オサエ	灰白色	7/12	包含層	043-06

第3表 出土遺物観察表(3)

番号	器 種	計 測 値			内 容		色 調	門牌前 残存年	出土位置	登録番号	
		1径	底径	器高	内	外					
174	土師器	紐	6.8	5.0	0.9	ナデ	オサエ	灰白・浅黄褐色	10/12	包含層	037-03
175	土師器	皿				ミガキ	ナデ	にぶい藍色		包含層	034-04
176	土師器	皿				ナデ	ナデ	褐色		包含層	038-05
177	土師器	鉢	25.2		15.6	ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	浅黄褐色	12/12	包含層	033-01
178	土師器	罎	28.6			1径部ヨコナデ・ナデ	オサエ・ハケメ (6本/1cm)・ケズリ・スス付着	淡黄・浅黄褐色	1/12	包含層	032-01
179	土師器	罎	30.0			1径部ヨコナデ・ナデ	ナデ・ハケメ (8-9本/1cm)	灰白色	1/12	包含層	014-03
180	土師器	罎				1径部ヨコナデ・ナデ	ハケメ (6本/1cm)・スス付着	淡黄・灰白色	1/12	包含層	042-04
181	土師器	罎				ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄・灰白色		包含層	040-08
182	土師器	罎	19.3			1径部ヨコナデ・ナデ・ハケメ	ハケメ (5本/1cm)・ケズリ・スス付着	淡黄・灰白色	1/12	包含層	043-07
183	土師器	罎	22.0			1径部ヨコナデ・ナデ	ハケメ (6本/1cm)・スス付着	淡黄・淡褐色	1/12	包含層	025-05
184	土師器	罎	25.5			1径部ヨコナデ・ナデ・オサエ	ハケメ (7本/1cm)・スス付着	にぶい藍色・灰白色	3/12	包含層	022-01
185	土師器	罎	31.2			ナデ	ナデ	淡黄色	3/12	包含層	042-03
186	土師器	罎	32.4			1径部ヨコナデ・ナデ	ハケメ (4-5本/1cm)	にぶい藍色・灰褐色	1/12	包含層	010-01
187	土師器	罎	25.8			1径部ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ	にぶい藍色・灰白色	4/12	包含層	042-01
188	土師器	罎	24.0			1径部ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ (4本/1cm)	淡黄・浅黄褐色	1/12	包含層	022-02
189	土師器	罎	26.6			1径部ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ	浅黄褐色	3/12	包含層	042-02
190	土師器	罎	27.0			1径部ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ	淡黄褐色	2/12	包含層	014-01
191	土師器	罎	27.0			1径部ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ (5本/1cm)・スス付着	浅黄褐色	3/12	包含層	037-02
192	土師器	羽蓋	28.0			1径部ヨコナデ・ナデ・オサエ	ヨコナデ・オサエ・ハケメ (6本/1cm)・スス付着	淡黄色	3/12	包含層	029-01
193	土師器	羽蓋	30.0			1径部ヨコナデ・ナデ・オサエ	ヨコナデ・オサエ・ハケメ (6本/1cm)	灰黄褐色・にぶい黄褐色	1/12	包含層	030-01
194	陶器	折縁深皿	31.0			ロタロナデ	ロタロナデ	淡黄色	2/12	包含層	027-01
195	陶器	折縁深皿	20.6	10.0	4.7	ロタロナデ	ロタロナデ	淡黄・にぶい褐色	3/12	包含層	034-01
196	陶器	平皿	14.4			ロタロナデ	ロタロナデ	灰白・灰オリーブ色	8/12	包含層	031-07
197	陶器	平皿	13.7			ロタロナデ	ロタロナデ	灰白・灰オリーブ色	1/12	包含層	020-06
198	陶器	平皿		4.8		ロタロナデ	ロタロナデ	灰白		包含層	016-05
199	陶器	縁なし小皿	9.7	8.7	0.8	ロタロナデ	ロタロナデ	淡黄・浅黄褐色	1/12	包含層	020-03
200	陶器	縁なし小皿		6.1		ロタロナデ	ロタロナデ・底部糸切り	明褐色・にぶい藍色		包含層	031-05
201	無釉陶器	水筒	3.3			ロタロナデ	ロタロナデ・底部糸切り	灰白・灰オリーブ黄色		包含層	034-06
202	磁器	皿	4.6			ロタロナデ	ロタロナデ	灰白・明緑灰色		包含層	031-08
203	瓦器	皿				ヘラミガキ	ケズリ後ミガキ	灰白・灰白色		包含層	041-02
204	陶製品	皿	1.7					緑褐色		包含層	064-10
205	鳥土製品	残存高さ 最大幅	3.2			ナデ	ナデ・オサエ	淡黄・にぶい黄褐色		包含層	001-03
206	縄文土器	鉢	直径 12.8		11.0	浮線刷文・ミガキ	ミガキ・筋1半に多量のウソを含む	淡黄褐色・にぶい藍色		包含層	062-02

第4表 出土土物観察表(4)

番号	名称	国	初鑄年代	出土位置	登録番号
207	開元通寶	唐	621年	包含層	039-01
208	開元通寶	唐	621年	表土	038-10
209	開元通寶	唐	621年	包含層	036-10
210	景徳元寶	北宋	1004年	包含層	039-06(1)
211	祥符通寶	北宋	1009年	包含層	039-06(3)
212	天禧通寶	北宋	1017年	包含層	038-06
213	天禧通寶	北宋	1017年	包含層	036-01
214	天聖元寶	北宋	1023年	包含層	036-04
215	天聖元寶	北宋	1023年	包含層	037-09
216	天聖元寶	北宋	1023年	包含層	037-01
217	皇宋通寶	北宋	1038年	包含層	038-04
218	皇宋通寶	北宋	1038年	包含層	039-04
219	皇宋通寶	北宋	1038年	包含層	037-03
220	皇宋通寶	北宋	1038年	包含層	037-05
221	皇宋通寶	北宋	1038年	包含層	037-08
222	皇宋通寶	北宋	1038年	包含層	037-12
223	皇宋通寶	北宋	1038年	包含層	037-07
224	皇宋通寶	北宋	1038年	包含層	036-05
225	皇宋通寶	北宋	1038年	包含層	038-02
226	皇宋通寶	北宋	1038年	SE31	038-03
227	皇宋通寶	北宋	1038年	包含層	038-05
228	皇宋通寶	北宋	1038年	包含層	038-11
229	皇宋通寶	北宋	1038年	包含層	038-12
230	嘉祐通寶	北宋	1056年	包含層	036-12

第5表 出土銭貨観察表

番号	名称	国	初鑄年代	出土位置	登録番号
231	治平元寶	北宋	1064年	包含層	037-04
232	治平元寶	北宋	1064年	包含層	037-11
233	熙寧元寶	北宋	1071年	包含層	036-08
234	熙寧元寶	北宋	1071年	包含層	039-02
235	熙寧元寶	北宋	1071年	包含層	036-07
236	熙寧元寶	北宋	1071年	包含層	038-07
237	元豊通寶	北宋	1078年	包含層	036-11
238	元豊通寶	北宋	1078年	包含層	039-06(4)
239	元豊通寶	北宋	1078年	包含層	036-09
240	元豊通寶	北宋	1078年	包含層	036-03
241	元豊通寶	北宋	1078年	包含層	037-10
242	元祐通寶	北宋	1086年	包含層	037-06
243	元祐通寶	北宋	1086年	包含層	038-09
244	紹聖元寶	北宋	1094年	包含層	038-01
245	紹聖元寶	北宋	1094年	包含層	038-08
246	紹聖元寶	北宋	1094年	包含層	036-06
247	紹聖元寶	北宋	1094年	包含層	036-02
248	紹聖元寶	北宋	1094年	包含層	037-02
249	□元通寶			包含層	039-06(2)
250	不明			SD41	036-13
251	不明			SD41	036-14
252	不明			包含層	039-05
253	不明			包含層	039-03



番号	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	外面の調整等	材質	重さ(g)	分類	出土位置	登録番号
254	8.7	3.2	1.5	オサ工	土師質	89.40	A 1	包含層	026-02
255	7.8	3.0	1.2	オサ工	土師質	29.05	A 1	SE31	003-08
256	7.0	3.4	1.3	オサ工	土師質	77.88	A 1	SK35	050-01
257	7.6	3.0	1.6	オサ工	土師質	56.72	A 1	表土	024-01
258	8.0	2.7	1.0	オサ工	土師質	50.00	A 1	包含層	032-05
259	5.7	2.1	1.0	オサ工	土師質	18.23	A 1	表土	024-05
260	6.3	2.6	1.0	オサ工後ナデ	土師質	39.33	A 1	表土	024-04
261	6.2	0.8	0.6	オサ工・表面一部黒変	土師質	15.07	A 1	表土	024-08
262	6.6	3.8	1.8	オサ工	土師質	58.14	B	包含層	024-02
263	6.7	3.7	1.8	オサ工	土師質	66.20	B	SE31	003-07
264	6.4	3.3	1.6	オサ工後ナデ	土師質	44.09	B	表土	024-03
265	4.5	2.4	0.5	オサ工	土師質	25.20	B	SX3	026-03
266	4.3	4.1	0.7	オサ工	土師質	53.90	D	包含層	032-04
267	4.0	3.8	0.8	オサ工	土師質	54.70	D	SR1	026-01
268	3.0	2.0	0.9		土師質	7.53	A 2	SE69	012-03
269	4.1	1.0	0.4	オサ工	土師質	4.86	A 2	SX3	024-10
270	3.0	1.1	0.4		土師質	3.40	A 2	包含層	026-05
271	5.6	1.4	0.3	オサ工	土師質	9.78	C 1	包含層	024-09
272	5.1	1.5	0.5		土師質	9.24	C 1	包含層	024-07
273	6.1	1.4	0.4		土師質	8.70	C 1	包含層	026-04
274	5.1	1.5	0.4	オサ工	土師質	9.50	C 1	表土	024-06
275	3.7	0.9	0.2		土師質	2.36	C 2	SE25	009-06

第6表 出土土錘観察表

番号	長軸(cm)	短軸(cm)	厚み(cm)	外面の調整等	材質	出土位置	登録番号
276	5.5	1.8	1.8	一面に穿孔あり	アイ岩	Fl4	012-02
277	9.0	4.2	2.0		アイ岩	包含層	055-02
278	11.8	4.2	2.2		アイ岩	包含層	021-01
279	8.8	3.5	1.8		砂岩	表土	032-03
280	11.2	2.6	0.8		アイ岩	包含層	055-03
281	7.2	3.9	1.4		砂岩	包含層	055-05
282	6.8	4.8	1.8		砂岩	包含層	055-01
283	8.4	5.4	1.4		アイ岩	包含層	041-01
284	5.2	3.0	0.6		アイ岩	包含層	044-03
285	4.8	3.0	0.6		アイ岩	包含層	041-02
286	4.6	3.5	1.0		砂岩	包含層	055-04
287	4.6	4.2	2.0	一面に穿孔あり	砂岩	包含層	023-05
288	5.8	5.6	1.0		アイ岩	SK68	012-01
289	4.0	3.4	2.5		アイ岩	包含層	041-04

第7表 出土磁石観察表

番号	長軸(cm)	短軸(cm)	厚み(cm)	使用器種	重さ(g)	分類	出土位置	登録番号
290	7.4	6.8	1.4	無軸陶器 碗(尾張型6型式)	55.70	A 2	包含層	032-07
291	6.2	5.4	0.8	無軸陶器 碗か皿	37.80	A 2	SE31	032-06
292	5.4	5.0	0.8	無軸陶器 碗か皿	26.60	A 2	包含層	020-09
293	2.6	2.4	1.6	無軸陶器 碗(渥美・湖西型5型式)	9.99	A 1	包含層	041-08
294	2.7	2.6	1.6	無軸陶器 碗	10.60	A 1	SE31	003-04
295	2.6	2.4	0.8	無軸陶器 擂鉢	6.40	B	包含層	032-08
296	2.9	2.8	0.9	無軸陶器 碗(渥美・湖西型)か	9.46	B	包含層	041-05
297	2.6	2.3	1.0	陶器 甕	7.54	B	包含層	041-07
298	3.0	2.8	0.8	無軸陶器 碗(渥美・湖西型)か	8.60	B	包含層	041-06
299	2.2	2.0	0.3	磁器(白磁)	2.20	C	包含層	044-02
300	1.8	1.6	0.6	磁器(染付)	2.30	C	包含層	044-01

第8表 出土加工円盤観察表

## V 結 語

今回の調査では、古墳時代初頭の古墳と鎌倉時代中頃から室町時代の石組み井戸や土坑・溝・小穴を検出した。また、調査区の南北を縦断するかたちで、恐らく平安時代末には埋没していたと考えられる河道が確認された。

遺物は、遺構出土のものはあまり多くはなかったが、包含層からは鎌倉時代中頃から室町時代の無釉陶器や土師器等が大量に出土した。発掘調査の結果を踏まえ、本遺跡に関する若干の考察を行いたい。

### 1. 縄文時代晩期浮線網縄文の鉢について

今回の調査で縄文時代の遺物として注目されるのは、包含層から確認されている残存状態が良好な縄文時代晩期の浮線網縄文をめぐらした鉢である。これはかなり残存状態が良好な資料であり、西日本での出土は希少な例となる。県内では小片ではあるが、美里村舞谷遺跡や津市納所遺跡などの例が知られる。舞谷遺跡は表採資料だが、納所遺跡の方は自然流水路から出土している。

三雲町周辺では縄文時代の遺跡の調査例はないが、今回の良好な出土例からみても、周辺に縄文時代の遺跡が存在する可能性は大いにあり得るであろう。今後の調査例が期待されるところである。

### 2. S X 3 (前田町屋1号墳)について

まず、S X 3から出土した特殊遺物といえる底部に赤色顔料の付着した石杵についてみてみたい。東側の肩付近から出土しており、上下などの正確な位置関係が判然としませんが、恐らく周溝内への意図的な供献や投棄ではなく、墳丘上からの転落であろう。全国的にみても出土例は希少であり、三重県内では史跡斎宮跡の第70-1次調査での報告例がある。包含層出土のため時期は不明だが、擦り潰す面には朱の痕跡が確認されている。<sup>(9)</sup> 県外の報告例では、当遺跡出土のものと同様に類似するものとしては、岐阜県の瑞龍寺山古墳群出土のものが挙げられる。<sup>(4)</sup> また、整形されていないが、朱の痕跡が残る石皿・擦石として県内では津市の位田遺跡の方形周溝墓からの出土例がある。<sup>(5)</sup>

この石杵と呼ばれる石製品は石臼と呼ばれる皿状

の石製品とセットを成し、朱やベンガラの細粒を磨り潰す用途に使用されたと考えられている。古墳から出土する石杵や石臼が埋葬儀礼に関わる特殊な用途、つまり赤色顔料を擦り潰すという行為を含む一連の儀礼的な意味があるという見解が現在では一般的理解となっている。<sup>(6)</sup> 杵・石臼の形態やそのセット関係に着目し、時期的な変遷に言及した北條芳隆氏の論文によると、石杵の形態的な変化はあまり顕著ではなく、石臼はその出現が石杵より遅れ、未加工に近いものから次第に定形化される傾向があることが指摘されている。時期的には、石杵は弥生時代後期後半の墳丘墓からは単独で出土し、古墳時代初頭になると石杵と丁寧な加工を施さない石臼がセットで出土するとされる。また、北条氏は石杵のみが出土する可能性として、次の2点を挙げている。ひとつは、赤色顔料は生産地でおおまかな精製がなされており、石杵に対応する摩擦面は石臼に限定されない点である。もうひとつは、両者を異なった埋葬施設に置き分けたのではないかという点である。S X 3からは石臼は出土していないが、時期的な問題よりも上記の2点に挙げられたような問題か、あるいはまた別の要素に起因する事象であると考えたい。

いずれにしても、S X 3出土の石杵がその形態から単なる実用品でないことは明らかで、単体での出土ではあるが、S X 3で何らかの赤色顔料を用いた葬送儀礼が展開されていたことは推定できよう。そして、S X 3におけるそうした儀礼的行為の存在をさらに裏付けるものとして二重口緑壺の出土がある。当遺跡で出土した二重口緑壺は、底部穿孔を施したいわゆる「二重口緑壺形埴輪」と呼ぶべきもので、円筒埴輪等と同様、墳丘に設置されたものと考えられる。2個体の内ひとつには外面に赤色顔料が付着している。伊勢では、初期の円筒埴輪よりはこの「二重口緑壺形埴輪」を持つ例のほうが多いことが言及されている。<sup>(8)</sup> これは、松阪市の深長古墳に、墳丘を囲んで列状に樹立するタイプと当遺跡のようにその他の土器も伴って、墳丘の要所に1~数個配するタ

イブとがあり、後者の方が時期的には先行するとされる。<sup>149</sup>当遺跡と同様の出土状況を呈する古墳には、津市の坂本山6号墳や松阪市大足2号墳<sup>150</sup>がある。坂本山6号墳から出土している3個体は墳丘の東～南麓からという比較的近接した位置で出土している。当遺跡の2個体も北側の一辺の互いにさほど遠くない位置で出土している。これは推測だが、複数の二重口緑壺を離れた場所ではなく近接して設置するという点にその方角に対する何らかの意識が働いていたのではないとも考えられる。

以上のようにみても、SX3は、古墳の全体形状は不明であるが、高杯等その他の土器と供に底部穿孔の二重口緑壺を墳丘の要所に配するという、やや古い様相を呈しており、出現期の古墳として位置づけることができよう。<sup>151</sup>周辺の松阪市には時期的にSX3と相前後する前述の大足遺跡や深長古墳があり、弥生時代終末期から古墳時代に至る過渡期の様相を検討するうえで新たな資料を追加したといえるだろう。また、遺跡は標高約2～2.5mの低地に立地している。1mも掘り下げるとすぐに湧水がみられるような当地は、恐らく古墳を築造するのに適していたとは思われない。にもかかわらず敢えてこの地を選択したこと、また赤色顔料の付着した遺物の出土、特に石杵はその出土例が希少なことからこの古墳の特異性を物語るものであるといえよう。弥生時代以降、不明な点が多い朱の生産や流通に関わる問題としても今後の検討を課題としたい。

### 3. 鎌倉時代中頃から室町時代の様相について

今回検出された遺構からは、建物跡こそ確認されなかった。しかし、遺物の出土状況や器種構成等を見る限りでは、他の中世集落とは異なった特殊な様相を見出すことはできないといえる。井戸の存在などからも何らかのかたちで当遺跡が当時の人々の生活の場を提供してきたことは間違いないであろう。以下に、出土遺物の所属時期から検討できる遺跡の廃絶時期について若干推測しておきたい。当遺跡の北方約6kmに所在する当時の港湾都市であったと想定されている安濃津遺跡群の中世集落が終焉するに至った一つの要因として、明応7(1498)年の大地震<sup>152</sup>の存在があることが考えられる。当遺跡からは大窯段階に至る陶器類はまったくみられず、集落の

廃絶時期は安濃津よりも少し早い15世紀中葉と思われる。調査から推測される集落の廃絶時期は明応大地震が起きた時期よりは少し早い<sup>153</sup>が、集落が地震により何らかの打撃を受けたことは、15世紀中葉以降の遺物がみられないことから推測できよう。このことを、当時の文献史料からも検討してみたい。前田町屋遺跡の所在する星合は、中世のいくつかの文献史料にその名を見ることができる。直接この地名がみえる史料には、室町時代の将軍が参宮街道を通過して伊勢に参宮した際の記述がある。ひとつは足利将軍義持が応永31(1424)年12月に参宮した時の『室町殿参宮記』<sup>154</sup>と『耕雲紀行』<sup>155</sup>、もうひとつは将軍義教が永享5(1433)年3月に参宮した時の『伊勢紀行』<sup>156</sup>である。これらの史料によると、足利将軍の伊勢参宮のルートは大体において京都を出発して現在の三重県に入ってからは、津市の豊久野を過ぎて安濃津に一泊し、雲出川を渡って三渡に至っている。3つの紀行文のうち特に注目したいのは『伊勢紀行』で、これによると、往路の記述で、「雲出の里」の次に「星合の里」そして、「かさ松」、「見わたり」と続いている。「見わたり」は現在の「三渡」のことであろう。つまり、雲出川を渡って三渡川に至るまでの間には、中世の参宮街道がその付近を通過していた星合の集落が存在していたことがわかる。<sup>157</sup>従って、前田町屋遺跡は中世においてこの星合の集落の一端であったと考えることができるのである。

そして、前述した遺跡の廃絶時期の問題を別の史料から検討しておきたい。大水2(1522)年に連歌師宗長の著した『宗長手記』<sup>158</sup>のなかに、自らの伊勢参宮の際の記述がみえる。それによると、宗長は尾張の野間から伊勢に渡り、龜山に赴いている。この時、彼は「みわたり」を舟で渡り、雲出川を過ぎ、明応の大地震以降の荒廃した安濃津の姿を目にする。ここにおいて、「みわたり」と「雲出川」の間に星合の記述はなく、将軍義教の時代には集落の営まれていた星合の地も明応の大地震によって存続し得なくなったと想像できよう。

以上、発掘調査の成果と文献史料から中世における当遺跡の姿を推定してきた。まとめてみると、今回発掘した調査区は、13世紀中葉から15世紀中葉までの間、付近には参宮街道の通っていた中世集落で

あった前田町屋遺跡の一角として機能していたと考えられる。また、町屋という小字名からも、ここが都市とはいえないまでも小規模な町といえるような空間であったことが想像できるのである。

三雲町内での調査は中ノ庄遺跡以来のことであったため、周辺の調査成果の蓄積が乏しかったという事情はあった。しかし、今回の調査では、標高2～

2.5mという低地においても古墳を造営する意識が存在していたこと、当地が中世において参宮街道付近の集落の一端であったことなどが確認できた。今後、三雲町内での調査が増加することによって、前田町屋遺跡を含めた周辺地域の歴史像に新たな知見が加わることを期待したい。

#### 【註】

- (1) 「第2章 原始・古代」(『美里村史 美里村、1994年)。
- (2) 伊藤久嗣ほか『納所遺跡』(三重県教育委員会、1980年)。
- (3) 横山洋平ほか「Ⅶ 第70次調査」(『三重県斎宮跡調査事務所年報1987 史跡 斎宮跡 発掘調査概報』三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所、1987年)。
- (4) 植崎彰一・萩野繁春『瑞龍寺山古墳群』(『岐阜市史 岐阜市、1979年)。
- (5) 山本義浩・米山浩之「Ⅴ. 位田遺跡」(『一般国道23号中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅹ』三重県埋蔵文化財センター、1997年)。
- (6) 本田光子「石柙考」(『古代』第90号 早稲田大学考古学会、1990年)。
- (7) 北條芳隆「3 葬送儀礼における朱と石臼」(『大阪大学文学部考古学研究報告第2冊 長法寺南原古墳の研究』大阪大学南原古墳調査団、1992年)。
- (8) 穂積裕昌「三重県の埴輪」(『第17回三重県埋蔵文化財展 三重の埴輪』三重県埋蔵文化財センター、1997年)。
- (9) 増田安生「Ⅴ. 松阪市深長町 深長古墳」(『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』、三重県教育委員会、1989年)。
- (10) 註(6)に同じ。
- (11) 児玉道明ほか「三重県津市 坂本山古墳群・坂本山中長墓群」(津市教育委員会、1970年)。
- (12) 小林 秀「7松阪市大足町 大足遺跡」(『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター、1990年)。
- (13) 註(6)に同じ。
- (14) 伊藤裕偉「安濃津」(三重県埋蔵文化財センター、1997年)。  
伊藤裕偉「中世の港湾都市・安濃津に関する覚書」(『ふびと』第49号 三重大学歴史研究会、1997年)。
- (15) 『室町殿伊勢参宮記』(『續群書類従』第十八輯下)
- (16) 『耕雲紀行』(『大神宮叢書神宮参拝記大成』)
- (17) 『伊勢紀行』(『大神宮叢書神宮参拝記大成』・『續群書類従』第十八輯 日記部 紀行部)
- (18) 「四 鎌倉時代から室町時代までの交通路」(『一志郡史』上巻其一 一志郡町村會、1955年)。
- (19) 『宗長手記』(『續群書類従』第十八輯 日記部 紀行部)

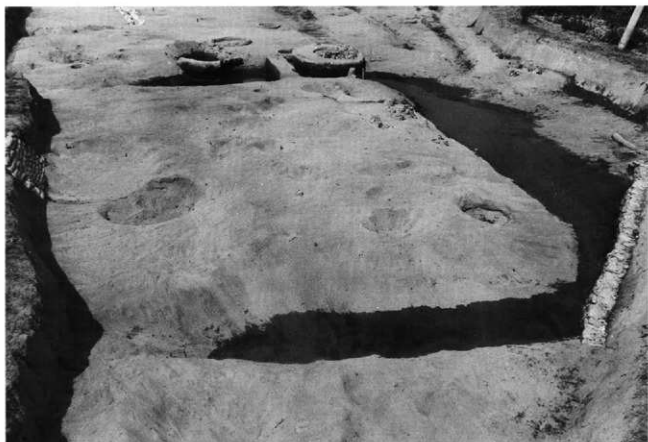
#### 【参考文献】

- ・竹内英昭ほか「宮山遺跡」(『一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ 三重県埋蔵文化財センター、1996年)。
- ・伊藤裕偉「古墳時代前期における土器製作技法の検討—伊勢地域における事例を通じて—」(『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会、1991年)。
- ・「第3回東海考古学フォーラム 前方後方墳を考える」(第3回東海考古学フォーラム三重実行委員会、1995年)。
- ・赤塚次郎「東海系のトレス—3・4世紀の伊勢湾沿岸地域—」(『古代文化』財団法人 古代学協会、1992年)。
- ・岡山真知子編「辰砂生産遺跡の調査—徳島県阿南市若杉山遺跡—」(徳島県立博物館、1997年)。
- ・赤塚次郎「濃尾平野低地部における古墳時代の壘」(『第4回東海考古学フォーラム 壘と壘 そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会、1996年)。

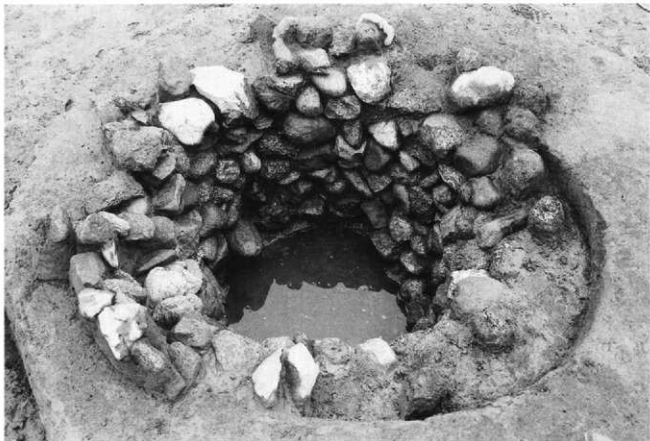
図版 1



調査区全景 北から



S X 3 (前田町屋 1号墳)



S E 25

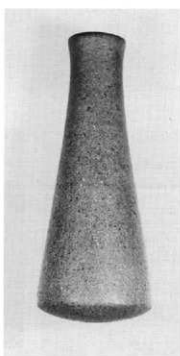


S E 16 (上)

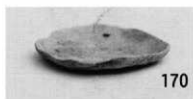
S X 3 土器出土状況 (左右・下)



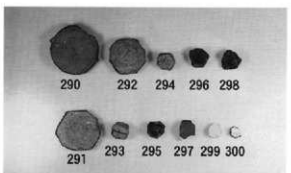
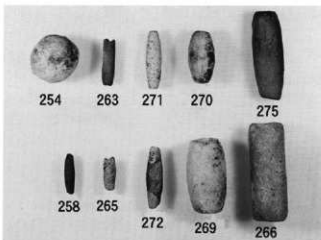
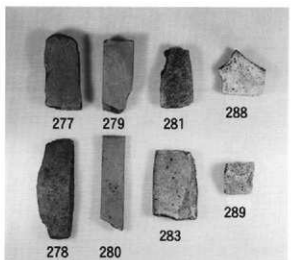
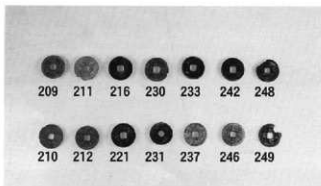
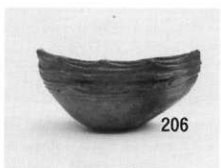
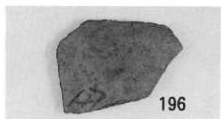
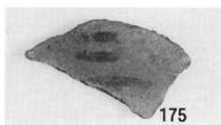
図版 3



出土遺物写真(1) (縮尺不同)







出土遺物写真(3)

# 報告書抄録

ふりがな	まえだまちやいせきはつくつちょうさほうこく							
書名	前田町屋遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	154							
編著者名	日栄 智子							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596(52)1732							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まちやまえだいせき 前田町屋遺跡	いしけんみ(まち)ういせき --志都三雲町屋合	244074		34° 38' 34"	136° 31' 48"	19960507 ? 19960912	2,000	県道津三雲 線橋梁整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
前田町屋遺跡		古墳時代 鎌倉時代 室町時代	古墳周溝・溝・土坑・ 井戸		土師器壺・石杵・縄文鉢 中世陶磁器・銅銭			

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに  
平成19(2007)年8月にデジタル化しました。

---

三重県埋蔵文化財調査報告154

## 前田町屋遺跡(第1次)発掘調査報告

1997. 3

編集 三重県埋蔵文化財センター  
発行

印刷 ㈱第一プリント社

---